

# 『今昔物語集』 訓釈語彙考

——巻26 注釈書訓釈異同表を利用した語義比較(ツツヤク・クジル)——

安部 清哉 編著  
伊藤 真梨子

## 論文要旨

『今昔物語集』は中古・中世における語彙と文体の関係を見る上で貴重な資料であるが、研究の進んだ現在でも、漢字表記語の訓が諸注釈書でゆれ、読みが確定していない語彙が少なくない。本稿では、中古・中世の語彙研究の一環として、『今昔物語集』の漢字表記語彙を取り上げ、5つの注釈書での訓釈異同表を提示しつつ(別表)、それを利用して、そこに見られる異訓から、2つの語彙における語彙史的考察とそれによる『今昔』での訓釈の問題を論じる(2章)。今回は、巻26の訓釈異同表を掲載し、その中で訓のゆれがある〈小声でひそひそ言う〉意の「ツツメク・ツツヤク」(2-1)と、〈(物を)穿つ〉意の「キサグ・クジル・エル」(2-2)の2つの語彙を取り上げ、各語の意味分析を行って訓を検討した。

**キーワード**【『今昔物語集』巻26 訓釈異同表 ツツヤク クジル 中古語彙】

## 一 はじめに

『今昔物語集』は、語彙研究資料としても、文体研究資料としても、さまざまな課題を提供してくれる日本語史の資料である。特に、その漢字の訓釈においては、さまざまな解釈が試みられ、訓の確定していない語彙が少なくない資料でもある。その訓を確定していくためには、一方で、中古・中世の基礎語彙の語義を検討するという作業も必要になってくる(日野資純 2007 他の一連の研究など参照)。

本稿では、『今昔物語集』(以下『今昔』とのみ記す)における訓と、中古・中世語彙の語義研究・訓釈研究の一環として、『今昔』を取り上げ、その代表的な5つの注釈書(新旧の大系本・全集本と集成本)における訓の相違を確認し、その異訓の中から、一部の語彙の語義比較を取り上げる。

なお、今回は、特に和文資料においても用例が多く現れる本朝世俗部の巻26を取り上げる。巻26の5つの注釈書での訓の異同一覧表を提示して(別表)、その異訓の状態を把握しつつ、その中から2つの類義語彙(動詞ツツヤク・ツツメクの〈小声でひそひそ言う〉意の語彙(2章)、及び、動詞キサグ・クジル・エル〈(物を)穿つ〉意の語彙)の意味の相違を検討する(2章)(付記1参照)。

なお、訓の比較に取り上げた注釈書は、次の5つの注釈書である。また、『今昔』関係の

索引は本稿最後の参考文献に挙げたものを使用した。

新・旧日本古典文学大系（岩波書店）

新・旧日本古典文学全集（小学館）

新潮日本古典集成（新潮社）

## 二 諸注釈書訓釈語彙語義比較小考

### 二一 (1) 『今昔物語集』の「つつやく」「つつめく」小考 (担当：伊藤真梨子)

#### 1. 問題点

『今昔物語集』巻第26第5話において、「云云」という語について「つつやく」「いひのく」という二つの読み方が見られた。また、この「云云」を「つつやく」と読んだ場合、一部の注釈書ではその意味の解釈に妥当だとは思われない部分が含まれていたため、本稿はこの「つつやく」という語の意味について、『今昔』やその前後の古典作品の用例を検討することによって考察をしていくこととする。なお、「つつやく」についての用例は『古典対照語い表』において、『土佐日記』に同義語「つつめく」が1例挙げられていたが、それ以外のものについては各辞書に挙げられている用例なども参考にして収集した。

(注1. 踊り字を表す二の字点はパソコンによる表記の都合上「々」に置き換えてある。

注2. 二字以上の踊り字は表記の都合上「〜」に置き換えてある。)

#### 2. 『今昔物語集』巻第26第5話の「云云」

『今昔物語集』巻第26第5話は継母が継子を殺そうとして失敗するという話であるが、1でふれたように、読み方の揺れている部分があり、それが次に引用した文の下線部の「云云」である。

児、何心モ無打口テ、「母堂ニ告奉ラン」ト云ヘバ、男、「人ニ不令聞デ、密ニ御マセ」ト云云。児、喜氣ニ思テ走り行後手ノ、髪ノタソ〜トシテ可咲気ナルヲ見（新大系）

この箇所「云云」という語についての各本による注釈は以下のようなものである。

旧大系「つつやく」：耳打ちした。

新大系「一」：「字類抄に「ウン〜、ツ、ヤク」の訓が載るが、蔭で不平を言う意の「つつやく」は合わない。「云ヘバ」の誤写か。(注：『今昔物語集索引』ではこの語を「うんうん」として収録している。)

旧全集「つつやく」

新全集「いひのく」：「底本「云去」、他本「云云」

集成「つつやく」：ささやいた。「云々 ツツヤク」(『字類抄』)。

「云云」の読み方として考えられるのは「うんうん（うんぬん）」「しかしか（しかじか）」「つつやく」である。

まず、「しかしか（しかじか）」と読む可能性があったのかということについてみてみたい。『今昔物語集文節索引』において、「しかしか（しかじか）」として挙げられているものは、すべて「然々」の字で表記されている部分であり、『今昔』で「云云」を「しかしか（しかじか）」と読む可能性は低いと判断されていることがわかる。また、「うんうん（うんぬん）」の訓は、『今昔物語集文節索引』で確認できた3例がすべて「若人欲了知 三世一切佛 應當如是觀 心造諸如来云々」といった引用の省略部分のみに当てられていた。該当箇所は、必ずしも省略箇所と見做さなければならぬものだとは思えないため「うんうん（うんぬん）」の訓もここでは取らずに考察してみたい。

それ以外の候補としてある、新全集での訓「いひのく」にも問題点がある。「いひのく」は下二段活用と四段活用とがあるが、『日本国語大辞典第二版（以下『日国②』とする）』での意味は下二段が「自分の考えを主張する。ためらわずにあえて言う。言い負かす。」で、四段の方は「ものを言って引き下がる。」である。ここは、継子（＝児）を殺すように継母に唆された男の召使が、子どもに「叔父さんのところに連れて行ってあげましょう」と告げている場面なので、下二段の方が不適當なのは言うまでもないが、四段の方も「男が子どもが走ってゆくを見送っている場面」なので意味が合わなくなる。

そうすると残りは「つつやく」である。新大系および集成の注には『字類抄』に「云云」を「ツツヤク」と読む例があるとしているが、これは『黒川本 色葉字類抄』に載っている用例であり、中二八「云云 ツ、ヤク」、中五三「云云 ウン〜 ツ、ヤク」というように2例が記載されている。また『色葉字類抄』よりも古い『観智院本 類聚名義抄』においても「云云」（法中六八）を「ツ、ヤク」と読む例が存在していた。したがって、『観智院本 類聚名義抄』は1241年の奥書があるので、少なくとも院政期にはこの「云云（つつやく）」という語が存在していたということはいえるだろう。以下では、より詳細な「つつやく」の意味を明らかにし、それがこの文脈に適合するのかどうかということを確認していきたい。

『日国②』では「つつやく」の意味は「つつめく」と同じだとされているので、ここで各辞書における「つつやく」「つつめく」の意味を挙げておこう。

『日国②』

つつめく：大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。ぶつぶつとかげ口をいう。  
ささやく。

つつやく：「つつめく（囁）」に同じ。

『岩波古語辞典 補訂版』

つつめき：不満げにぶつぶつ言う。

つつやき：「つつめき」に同じ。

『小学館古語大辞典』

つつめく：こそこそと小さな声で言う。ささやく。「つつやく」とも。

つつやく：「つつめく」に同じ。

『角川古語大辞典』

つつめく：ひそかにものを言う。不満を私語する。ささやく。「つつやく」とも。

つつやく：「つつめく」に同じ。

このように見てくると、「つつめく」「つつやく」には「ぶつぶつと不平・不満をいう」という意味と「小声でものをいう」という二つの意味があると考えられる。

そうすると、新大系で指摘されているように「つつやく」を「蔭で不平を言う」という意味だと考えれば、この箇所には「つつやく」があるのは不適であるが、ここでの「つつやく」の意味が「大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。」という意味だと考えれば、ここを「つつやく」と読んでも問題はないだろう。

さて、ここで気になるのは、何故、『今昔物語集』巻第26第5話（新大系）では「つつやく」を「蔭で不平を言う」という意味に限定しているのかということである。そこで、以下では、この解釈の根拠となるような用例が存在しているのかどうかということを確認するため、この「つつやく」および同義語とされる「つつめく」の用例を他作品等から集めて考察を加えた。

### 3. 他作品等での「つつやく」「つつめく」の例

以下では『今昔』やそれ以外の作品での「つつめく」と「つつやく」の用例を検討することによって、「つつめく」「つつやく」の意味を検証していきたい。

#### 3-1. 他作品等での「つつめく」の例

○『日本霊異記』上巻第34（これは『今昔物語集』巻第17第48話の出典となっている話であるが、『今昔』では該当部分底本破損。）

買ひし人転へ聞き、すなはち盗まれし衣なることを知り、当頭きて求めず、（新大系）

この箇所についての各本での注釈は以下の通りである。

旧大系：ひそかにささやく程度で、返してくれとは言わなかった。

新大系：そろってがやがや言って。底本訓釈「当頭〈川々女支天〉」。名義抄に「詢 ツ、メク」とみえる「詢」は「响（鳥の鳴き声をあらわす）」の異体字であろう。「つつめく」は、おしゃべりする意であろう。もっと大きな声のぼあいは、「どどめく」。「当頭」は、即時に、一斉にたちまちに、の意。即座に衆議一決するのである。

旧全集：こそこそとつぶやいているだけで、衣を返せとは言わなかった。

訳：こそこそ不満をつぶやだけで返せとは言わなかった。

新全集：こそこそとつぶやいているだけで、衣を返せとは言わなかった。

訳：こそこそ不満をつぶやだけで返せと騒ぎ立てるでもなかった。

まず、『詢』と『响』が異体字関係にある」としている新大系の解釈には、その根拠が明らかでないため疑問が残る。また、「当頭」は『日国②』によると「頭の上であること。または真向かいであること。間近であること。にわかであるさま。すぐに。たちまちに。」という意味であるので、「响」が表す「鳥がなくようなおしゃべり」と「当頭」の「すぐに」という意味を合わせて、新大系のように「そろってがやがや言って。」「即座に衆議一決するのであろう。」という解釈が出てくる可能性もあるとは思われるが、これは、盗まれた着物が元の持ち主のところへと帰ったという話で、盗品を買った人が盗品と知ったので返せとは言わなかったという箇所であるので、話の内容から考えると、むしろここでこそ「蔭で不平を言う」という意味が当てはまりやすいのではないだろうか。事実、新旧全集ではこの箇所は「こそこそ不満をつぶやく」と訳されている。それに、新大系の注にある「詢」という漢字は『大漢和辞典』によると、「詬に同じ。㊦はぢ。㊧ののしる。」という意味であり、「詬」は「㊦はづかしめる。㊧はぢ。はづかしめ。㊨ののしる。㊩いかる。㊪たくみなものいひ。㊫姓。」という意味であるため、ここからして、「つつめく」という語に「不平や不満をいう」という意味が含まれていることは妥当だと考えられる。

○『日本霊異記』中巻第30（これは『今昔』巻第17第37話の出典になっている話であるため、巻第17第37話もまとめて扱うことにする。）

大徳告げて曰はく、「咄、彼の嬢人、其の汝が子を持ち出でて淵に捨てよ」とのたまふ。

衆人聞きて、当頭きて曰はく「慈有る聖人、何の因縁を以ちてか是の告有る」といふ。

（新大系）

この部分に対する各本での注釈は以下の通りである。

旧大系：ひそひそとささやいて。

旧全集：ひそひそと不満をもらす。ぶつぶつ言う。上巻三十四話訓釈「当頭川々女支天（ツツメキテ）『土佐日記』二月一日の条「怨ゑじもこそし給べとて、つつめきて止みぬ」の「つつめく」も同語。

訳：人々はこの言葉を聞き、ぶつぶつ不満をささやき合って、

新全集：ひそひそと不満をもらす。ぶつぶつ言う。上巻三十四話訓釈「当頭川々女支天（ツツメキテ）『土佐日記』二月一日の条「怨ゑじもこそし給べとて、つつめきて止みぬ」の「つつめく」も同語。

訳：人びとはこの言葉を聞き、ぶつぶつ不満をささやき合って、

○『今昔物語集』巻第17第37話

行基菩薩、此ノ母ノ女ニ告テ宣ハク、「其ノ汝ガ子、持出デ、速ニ淵ニ棄テヨ」ト。諸ノ人此ヲ聞テ、当頭キテ云ク、「慈悲広大ノ聖人トシテ、何ノ故ヲ以テ、「此ノ子ヲ棄テヨ」トハ宣フゾ」ト。(新大系)

この部分に対する各本での注釈は以下の通りである。

旧大系：よみは、靈異記興福寺本(34)の訓釈および字類抄、ツの暈字による。名義抄、ツ、メクとよむ「詢」にツ、ヤクの訓あり、字類抄また「云云」をツ、ヤクとよむので、大体の意は察せられよう。即ち不満として私語するを指す。

(注：下線部は誤植で「詢」が正しい。)

新大系：ぶつぶつ言い合う。興福寺本靈異記・上・34に訓注あり。土佐日記「つつめきてやみぬ」。和文系の語。

旧全集：色「当頭ツ、メク」。興福寺本『靈異記』上の三十四訓注「当頭ツ々女支天」。ぶつぶつつぶやいて。行基の真意を解せず、不審に思つてささやき合ったさまをいう。

訳：そこで行基菩薩がこの女に向かい、「そなたのその子を連れ出して、すぐさま淵に捨てなさい」と言う。人々はこれを聞き、不満げに、「お慈悲の広大なお聖人もあろうお方が、なにゆえにこの子を捨て〔よ〕とおっしゃるのか」と口の中でぶつぶつ言い合った。

新全集：色「当頭ツ、メク」。興福寺本『靈異記』上の三十四訓注「当頭ツ々女支天」。ぶつぶつつぶやいて。行基の無慈悲な発言を、不審に思つてささやき合ったさまをいう。

訳：そこで行基菩薩がこの女に向い、「そなたのその子を連れ出して、すぐさま淵に捨てなさい」と言う。人々はこれを聞き、不満げに、「お慈悲の広大なお聖人もあろうお方が、なにゆえにこの子を捨て〔よ〕とおっしゃるのか」と口の中でぶつぶつ言い合った。

これは、行基が人々に法を説いているときに、泣き止まない子どもを抱く女に対して、子を淵に捨てるようにと言った場面である。人々から尊敬される行基がいきなりおかしなことを言い出したために、人々が不審に思つてひそひそ言い合った、という場面であるので、ここの意味も「大声で言うのをはばかりで、ひそひそものをいう。」が一番いいのではないかと考えられる。

○『土佐日記』(新全集)

「船君のからくひねり出だして、よし、と思へる言を。怨じもこそし給べ」とて、つつめきてやみぬ。

脚注：「ささめく」に同じ。ひそひそと物を言う。

訳：「船君が、懸命にひねり出して、自分でいいと思った歌じゃないか。お恨みになるだろう」ということで、遠慮して何も言わないことにした。

訳（『土佐日記全注釈』）

「船主さんが、やっと捻り出して、よくできたと思っている歌ですよ」

「(そんなことが耳にでもはいたら) きっと怨みもなさるでしょうよ」

というので。ムニヤムニヤと言ったきりにしてしまった。

『土佐日記全注釈』ではこの「つつめく」について以下のように書かれている。

『類聚名義抄』に、「詢」という字を、ツツメク・ツツヤク・ハツ・アザムクなどとよませている。詢は、「不平をいう」「罵る」といった意味である。また『雅言集覧』引用の『藝文抄』には、「囁囁」をツツメクとよませている。囁囁は、物言わんと口をつぐむ貌で、土佐日記の場合により適切な用語であるといえる。物を包む意味の動詞「つつむ」の語幹「つつ」と、「つつめく」の語幹「つつ」とが同一語源であるならば、囁囁の意によって、この本文は解釈すべきであろう。

「つつめく」の「つつ」と「つつむ」の「つつ」が同一語源であるのかそうでないのかはさておくとしても、ここは、船頭が詠んだ歌のできればえについてこそこそと囁き合っているという場面であるので、「つつめく」の意味は「大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。」という意味で特に問題はないと思われる。

ちなみに、『大漢和辞典』によると、「囁囁」の意味は「㊦物を言ひかけてやめるさま。臆病で、口を動かすだけで、はつきり物を言へぬさま。㊧ささやく。㊨多言する。かまびすしい。」である。

#### ○『栄花物語』卷八（新全集）

中宮はよろづまだ若うおはしまして、何ごとも思し入れぬ御有様なれど、この御事をわづらはしげにつつめくめり。

頭注：ひそひそ物を言う。

訳：中宮（彰子）は万事につけてまだお若くいらっしゃって、何事もお気になさらぬご様子であったが、まわりではこの御事をいかにも厄介なことが起きたとひそひそ困惑しているようである。

これは、一条天皇が定子の妹と深い仲になったことに彰子の周囲が困ったことだと言って  
いる場面である。相手が彰子方にとって目障りな定子の妹であるとしても、話題になっているものが天皇の行いであるので、「不平や不満を言う。」というほどの強い気持ちの表明になるのは適切ではないと考えられる。やはり、ここでの意味も「大声で言うのをはばかり、

ひそひそものをいう。」というあたりが適当であるだろう。

### 3-2. 他作品等での「ツツヤク」の例

#### ○『愚管抄』巻5 二條

大方世ノ中ニハ三條内大臣公教、ソノ後ノ八條太政大臣以下、サモアル人々、「世ハカクテハイカバセンゾ。信賴・義朝・師仲等ガ中ニ、マコトシク世ヲオコナフベキ人ナシ」。主上二條院ノ外舅ニテ大納言經宗、コトニ鳥羽院モツケマイラセラレタリケル惟方檢非違使別當ニテアリケル、コノ二人主上ニハツキマイラセテ、信賴同心ノヨシニテアリケルモ、ソ、ヤキツ、ヤキツ、「清盛朝臣コトナクイリテ、六波羅ノ家ニ有ケル」ト、トカク議定シテ、六波羅へ行幸ヲナサント議シカタメタリケリ。

頭注 ソソヤク：こそこそと話す。

ツツヤク：つつめくと同義。ささやく。

ここは、公教や經宗らが、何かと議論をして二条天皇の六波羅への行幸について決めた場面なので、「不平」「不満」を言っているわけではなく「大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。」という意味であると考えて問題ないだろう。

#### ○『延慶本 平家物語』 第三本 太政入道他界事付様々ノ怪異共有事

太政入道重病ヲ受給ヘリトテ、六波羅ノ辺騒アヘリ。様々ノ祈共始ルト聞ヘシカバ、「サミツル事ヨ」トゾ、高モ賤モサ、ヤキツ、ヤキケル。病付給ケル日ヨリ、水ヲダニモ喉ヘ入給ハズ。身中熱スル事、火燃ガ如シ。

平清盛が重病に陥ったことを聞いた人々が、それ見たことかと、こそこそと言いついてる場面であるため、これも「大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。」という意味であると思われる。

#### ○『狂言記』巻二・七 内沙汰

「その時に、おれが見ぬかと思ふて、左近と、つゝやき、さゝやき、聞いたぞいやい（新大系）

注：「ささやき」に同じ。妻と左近との姦通を匂わせる。和泉流の天理本では「目吸い、鼻吸いして」などともっと露骨に言う。

これは、夫が妻に対して、妻と不倫相手がこそこそと何かを話していただろう、と問い詰めている場面であり、「つつやい」ていたのは妻とその不倫相手であるので、「つつやく」の意味は「ひそひそものをいう。」だと考えてよいだろう。

## ○『古浄瑠璃正本集 第四』 ほうねんき (法然記)

せいし丸、つつしんで (中略) と。あそはし給へば。しんか大じん一どうに。さてもやさしき、ちごかなと。かんにたへさせ給ひけり。扱、なかあきらがちやくし、つねはる。なんじは、いかにとの給へは。とかうの、ことばなく。かほにもみぢを、ひきちらし。すご〜としてぞ、いたりける。わかきくぎやう、てん上人。つゞやき、ささやき。一どにどつとぞ、わらひける。

これは、上手に和歌を詠んだ「せいし丸」に対して「つねはる」が和歌を詠めなかったことを笑ったという場面であるので、「つつやく」の意味は「不平」や「不満」を言ったというよりも、「ひそひそものをいう。」と捉えるべきである。

## 4. 「つつめく」と「つつやく」の比較

ここで、3で見てきた「つつめく」と「つつやく」とについて、表の形で簡単にまとめ、この二つの語の間で使われ方などに違いがないのかどうかを確かめてみたい。

作品	成立年代	表記	かな	意味	状況
『日本靈異記』 上巻第 34	822 年頃	当頭き	つつめき	蔭で不平を言う。	盗品をそれと知らずに買ってしまった人が。
『日本靈異記』 中巻第 30	822 年頃	当頭き	つつめき	大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。	聴衆が行基の言動を不審に思っている。
『土佐日記』	935 年頃	つつめき	つつめき	大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。	船頭の歌について客がこそそと言い合った。
『栄花物語』 卷八	11 世紀	つつめく	つつめく	大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。	天皇の女性関係についてこそそと言い合った。
『今昔物語集』 卷第 17 第 37 話	12 世紀 前半	当頭キ	つつめき	大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。	聴衆が行基の言動を不審に思っている。
『今昔物語集』 卷第 26 第 5 話	12 世紀 前半	云云	★	大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。	使用者が主人の息子にひそひそ告げた。
『観智院本類聚名義抄』法上四九	1241 年 奥書	詢	ツ、メク ツ、ヤク アサムク ハツ		
『観智院本類聚名義抄』法中六八	1241 年 奥書	云云	ツ、ヤク		
(参考:『黒川本色葉字類抄』中二八)		當頭	ツ、メク		
(参考:『黒川本色葉字類抄』中二八/中五三)		二八: 云云 五三: 云云	ツ、ヤク ウン〜 ツ、ヤク		

『愚管抄』 巻5 二條	1220年	ソ、ヤキ ツ、ヤキ	そそやき つつやき	大声で言うのをはば かって、ひそひそも のをいう。	貴族たちが話し合っ て。
『延慶本 平家物語』 第三本	14世紀	サ、ヤキ ツ、ヤキ	ささやき つつやき	大声で言うのをはば かって、ひそひそも のをいう。	不特定多数が時の権力者 について噂した。
『狂言記』巻二・七 内沙汰	1660年	つゝやき、 さゝやき	つつやき、 ささやき	大声で言うのをはば かって、ひそひそも のをいう。	不倫関係にある男女の睦 み合い。
『ほうねんぎ』	1666年	つゞやき、 ささやき	つづやき、 ささやき	大声で言うのをはば かって、ひそひそも のをいう。	貴族が子どもを馬鹿にし てひそひそ言い合った。

こうして見てみると、「つつめく」と「つつやく」とでは、意味においては、同じ「大声で言うのをはばかって、ひそひそものをいう。」というものだとしても、状況から考えて「つつめく」の方が、それに「不審や不満」が含まれているものが多く、「つつやく」ではどちらかという「嘲ったり侮ったりしている」という要素が含まれているものが多い、という違いがあるといえるのではないだろうか。

また、「つつめく」と「つつやく」とははっきりと現れる時代が異なっていて、『栄花物語』以前が「つつめく」、『愚管抄』以降は「つつやく」であり、『今昔』では「つつめく」「つつやく」の両方が見られる、ということが分かる。そして、特に「つつやく」については、『愚管抄』以降はすべて「そそやく」もしくは「ささやく」とセットになって使われていて、慣用句的な言い回しになっているのではないかと考えられる。ただし、『今昔』の「つつめく」の例がある話は『日本霊異記』と同内容の話なので、この「つつめく」はその影響で存在しているだけであり、この時代にはもう「つつめく」ではなく「つつやく」だった可能性もある。

## 5. まとめ

今回の調査の結果分かったことは、以下の二点である。

- ① 「つつやく」と「つつめく」は同義語として扱われているが、その意味には微妙な違いがあり、「不平や不満の表明」は「つつやく」よりも、「つつめく」の方に強い要素だと考えられ、逆に「つつやく」では「嘲弄し侮る」という要素が見られやすい。
- ② 「つつやく」と「つつめく」とでは現れる時代が異なっていて、平安時代末頃を境として、それ以前は「つつめく」、それ以降は「つつやく」が使われていたと考えることができる。

そして、そもそも今回の調査のきっかけとなった、『今昔』巻第26第5話の「云云」の意味であるが、以上の考察の結果から、これを「蔭で不平を言う」という意味のみとした新大系の解釈は積極的に支持されるものではないということがはっきりしたと思われる。「つつ

やく」には『日国②』にあるように「大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。」という意味があり、今回調べた範囲では、むしろそちらの意味に解釈される用例が多い上に、「不平や不満の表明」という要素は「つつやく」ではなく「つつめく」に強いものであるので、やはり、巻第26第5話の「云云」は「つつやく」と読まれるべきであり、「大声で言うのをはばかり、ひそひそものをいう。」という意味で解釈されるべきだろう。

## 二一 (2) 『今昔物語集』の「キサグ」「クジル」「エル」小考 (担当・栗原さよ子)

### 1. 問題点

『今昔』巻26の14話の「髒」の漢字について、(1)、(2)のように、キサグ・クジル・エルの三つの訓でゆれがみられた。

- (1) 「瓶ニコソ有ケレ。人ノ骨ナドヲ入テ埋ミタリケルニカ」ト、氣六借ク思エケレドモ、構テ髒開テ瓶ノ内ヲ見ニ、金ヲ一瓶入テ埋ケルヲ見付テケレバ (後略) (『今昔5』(新日本古典文学大系 (以下、新大系) 37) 62頁)

	〔読み〕	〔意味〕
旧大系	くじりあけテ	——
新大系	きさげあけテ	こじ開けて (注14)
旧全集	くじりあけテ	こじあけて (注33)
新全集	ゑりあけテ	穴をくり抜いて (注17)
集成	くじりあけテ	——

- (2) 然テ居所ニ返テ、皮子開テ、小瓶ノ口ヲ髒テ、金百両ヲ取出シテ持行テ (後略) (『今昔5』新大系64頁)

	〔読み〕	〔意味〕
旧大系	くじりテ	——
新大系	きさげテ	——
旧全集	くじりテ	——
新全集	ゑりテ	——
集成	くじりテ	——

「髒」の字について、「日本古典文学大系」(以下、旧大系)・「日本古典文学全集」(以下、旧全集)・「新潮日本古典集成」(以下、集成)では「クジル」、新大系では「キサグ」、「新日本古典文学全集」(以下、新全集)では「エル」の訓をあてている。本稿では、そのいずれの訓が妥当であるかを訓の意味に焦点をあてて検討する。

具体的手法としては、『今昔物語集』のほかの箇所及び主として平安～鎌倉期の文献にみられる「キサグ」、「クジル」、「エル」それぞれの訓の用例について意味分析を行い、いずれの訓の意味が巻26・14話の当該箇所の文脈にふさわしいかを判断する。

## 2. 『今昔物語集』にみられるキサグ・クジル・エルとその複合語

### 2.1. 『今昔物語集 自立語索引』による用例数

『今昔物語集 自立語索引』（訓は「旧大系」による）によれば、キサグ・クジル・エル及びその複合語は、以下の通りである。

キサグとその複合語 0 例

クジルとその複合語 16 例（うち、題に含まれるもの 2 例）

クジリアク 1 例、クジリヒラク 1 例（共に「劈開」）

クジリスツ 4 例

クジリトホス 1 例

クジリトル 2 例

クジル 7 例（うち、2 例が題に含まれる）

エルとその複合語 17 例

エリアラハス 1 例

エリイレ 1 例

エル 14 例

キザミエル 1 例

それぞれの訓があてられている漢字についてみると、クジルの漢字に、巻 26 の 7 話、14 話以外は、「抉」「棲」の字が使われている。エルの漢字は「彫」「刻」の字である。

### 2.2. 『今昔物語集索引』（新大系別巻）による用例数

一方、『今昔物語集索引』（新大系別巻）では、以下の通りである。

キサグとその複合語 3 例

キサグ 1 例

キサゲアク 2 例

クジルとその複合語 15 例（うち、2 例は題に含まれる）

クジリスツ 4 例

クジリトホス 1 例

クジリトル 2 例

クジル 8 例（うち、2 例は題に含まれる）

エルとその複合語 18 例

エリアラハス 1 例

エリイル 1 例

エル 15 例

## キザミエル1例

漢字については、キサグは「𪔐」「𪔑」で、これは旧大系ではクジルとその複合語となっているものである。クジルは、「抉」「捷」及び「排」の字、エルは、「彫」「刻」の字であった。「排」以外の「抉・捷・彫・刻」の字にクジル・エルいずれをあてるかは、校注者の間で見解がおよそ一致しているようである。「𪔐」「𪔑」をクジル、エル、キサグのいずれで読むのが現時点での課題となる。

## 2.3. 『今昔物語集』にみられるキサグ・クジル・エル及びその複合語の例

以下に、『今昔物語集索引』によってキサグ・クジル・エルの訓が当てられている箇所を挙げる（引用は、「新大系」による。題に含まれる例は除く。「新大系」の記載箇所は、①—1-1のように記し、第1巻—1頁—1行を表わす）。

〔キサグ〕

- (3) 然テ居所ニ返テ、皮子開テ、小瓶ノ口ヲ𪔑テ、金百両ヲ取出シテ持行テ、(後略) (巻26・14話、⑤—64—3、「旧大系」ではクジリ・テと訓ずる。)

〔キサゲアク〕

- (4) 男、長櫃ヲ塵許𪔑開テ見レバ、長七八尺許ナル猿、横座ニ有リ。(巻26・7話、⑤—31—11、「旧大系」では「𪔑」の字、「旧大系」ではクジリヒラキ・テと訓ずる。)
- (5) 「瓶ニコソ有ケレ。人ノ骨ナドヲ入テ埋ミタリケルニカ」ト、氣六借ク思エケレドモ、構テ𪔑開テ瓶ノ内ヲ見ニ、金ヲ一瓶入テ埋ケルヲ見付テケレバ (後略) (巻26・14話、⑤—62—11、「旧大系」ではクジリアケ・テと訓ずる。)

〔クジル〕

- (6) 重キ咎有テ、波斯匿王此ノ群賊ヲ皆捕ヘテ、各目捷リ手足ヲ切テ、高禪山ト云フ山ノ扶ニ追ヒ棄タリ。(巻1・38話、①—95—11)
- (7) 彼ノ太子ノ眼ヲ抉シ所ハ、徳叉尸羅國ノ外、東南ノ山ノ北也。(巻4・4話、①—305—6)
- (8) (前略) 眼ヲ抉テ婆羅門ニ施シ、血ヲ出シテ婆羅門ニ飲シメ、如此クノ有難キ事ヲソラ施シ給フ。(巻4・17話、①—335—2)
- (9) 「君、既ニ耳ヲ被搭レタリ。当ニ耳可聾シ。我レ、君ヲ助ケテ、其ノ中ノ物ヲ却ケム」ト云テ、手ヲ以テ其ノ耳ヲ排ル。(巻9・34話、②—250—11、但し、「旧大系」では、ヤブ・ルと訓ずる。)
- (10) (前略) 神ナラバヨモ刀モ立ジヤ。腹ニ突立テ試ン」ト云テ、塵許捷ル様ニスルニ、猿叫テ手ヲ摺ニ、(後略) (巻26・8話、⑤—40—9)
- (11) (前略) 遠助ガ出タル間ニ、妻蜜ニ箱ヲ取下シテ開テ見ケレバ、人ノ目ヲ捷テ数入レタリ。(巻27・21話、⑤—129—14)

[クジリスツ]

- (12) 「速ニ太子ノニノ眼ヲ**抉リ捨テ**、太子ヲ国ノ境ノ外ニ可追却シ」(巻4・4話、①—302—14)
- (13) 「我がニノ眼ヲ**抉リ捨テ**我レヲ可追シ」ト有り。(巻4・4話、①—302—16)
- (14) (前略) 忽ニ旃荼羅ヲ召テ哭々クニノ眼ヲ**抉リ捨ツ**。(巻4・4話、①—303—2)
- (15) (前略) 父ノ大王ノ宣旨ニ依テ、ニノ眼ヲ**抉リ捨テ**国ノ境ヲ追ヒ出サレタレバ、(後略)(巻4・4話、①—304—1)

[クジリトホス]

- (16) 池ニハ槌ト云フ物ヲ立テ、打樋ヲ構テ水ヲバ出セバコソ、池ハ持ツ事ニテハ有ルニ、此レハ堤ヲ**棲通シ**テケレバ、漸ク其ノ穴顔レテ広ク成ケル程ニ、(後略)(巻31・22話、⑤—488—15)

[クジリトル]

- (17) 其ノ目極テ善カリツレバ、**抉リ取**テ爰ニ持来タリ。(巻4・22話、①—344—7)
- (18) 夫捕ヘテ膝ノ上ニ曳キ臥セテ、眼ヲ**抉リ取**テ、身ヲバ大路ニ曳捨ツ。(巻4・22話、①—345—3)

[エル]

- (19) 塔ヲ立ル功德ハ、只戯レニ石ヲ重ネ、木ヲ**彫**タルソラ不可思議ナル者也。(巻4・3話、①—300—6)
- (20) 婆羅門ノ云ク、「大王若シ法ヲ聞カムガ為ニ我レヲ供養セムト思サバ、王ノ御身ニ千所ノ疵ヲ**彫**テ、其レニ完ノ油ヲ満テ、灯心ヲ入レテ燃シテ供養セバ、(後略)(巻5・9話、①—418—8)
- (21) 大王婆羅門ノ云ガ如ク身ニ千所ノ疵ヲ**彫**テ、其レニ完ノ油ヲ満テ、上妙ノ細畳ヲ以テ灯心トシテ火ヲ付テ燃ス。(巻5・9話、①—419—7)
- (22) 恵明、具ニ此ノ事ヲ記シテ、石ヲ**彫**テ納メテケリ。(巻7・24話、②—133—10)
- (23) 皇子心ニ思ヒ煩テ、山ノ腹ヲ指テ、其面ニ弥勒ノ像ヲ**彫**リ奉ラムト為ルニ、力無シ。(巻11・30話、③—82—16行)
- (24) 其時ニ、皇子仰テ巖ノ上ヲ見給フニ、弥勒ノ像、其形チ鮮ニシテ**彫**リ奉リタリ。(巻11・30話、③—83—4)
- (25) 其ノ後、僧彼ノ猿詭ヘシ法花経ヲ不書畢ズシテ、仏ノ御前ノ柱ヲ**刻**テ籠メ置キ奉ツ。(巻14・6話、③—297—13)
- (26) 「蜜ニ此ノ後ロノ海ノ辺ニ有ル大ナル松ノ木ヲ伐テ、此レヲ船ノ形ニ**刻**テ、其レニ乗テ蜜ニ此ヲ出デ、(後略)」(巻16・2話、③—470—12)
- (27) (前略) 八人シテ此ノ木ヲ伐テ忽ニ**刻**リツ。此ニ乗テ、此ノ観音ノ像ヲ船ノ内ニ安置シ奉テ、(後略)(巻16・2話、③—470—13)

- (28) 判官代ヲ馬ヨリ引キ落シテ、刀劍ヲ以テ切り、弓箭ヲ以テ射、棒ヲ以テ貫キ、足ヲ切り、手ヲ折り、目彫リ、鼻ヲ削リ、口ヲ割キ、段々ニ其ノ身ヲ殺シ伏セツ。(巻16・③—472—6)
- (29) 御手ヲ折テ前ニ棄テ、御足ヲ切テ傍ニ置キ、御眼ヲ彫リ、鼻ヲ削リ奉レリ。(巻16・3話、③—473—3)
- (30) (前略) 蕪ノ根ノ大ナルヲツ引テ取テ、其ヲ彫テ、其ノ穴ヲ娶テ姪ヲ成シテケリ。(巻26・2話、⑤—6—11)
- (31) 「此ニ穴ヲ彫タル蕪ノ有ゾ。此ハ何ゾ」ナド云テ、(後略)(巻26・2話、⑤—7—1)
- (32) (前略) 此ノ垣ノ内ニ入テ、大キナリシ蕪一ツヲ取テ穴ヲ彫テ、其レヲ娶テコソ、本意ヲ遂テ垣内ニ投入テシカ」ト云ケルヲ、(後略)(巻26・2話、⑤—7—16)
- (33) 次ニ銚ヲ取テ持来タリ。天井ニ穴彫タリケリ。(巻29・13話、⑤—325—15)

[キザミエル]

- (34) 其時ニ、天人是ヲ哀ビ助ケテ、忽ニ此仏ヲ刻ミ彫リ奉ル。(巻11・30話、③—83—1)

[エリアラハス]

- (35) 此寺ハ、弥勒彫顯シ奉テ後、程ヲ経テ、良弁僧正ト云フ人ノ見付ケ奉テ、其後ヨリ行ヒ始タルゾト人云フ。(巻11・30話、③—83—9)

### 3. キサグ・クジル・エルの意味分析

キサグ・クジル・エルのいずれかの訓をそれぞれの校注者があてているということは、この3語が動作動詞として類義関係にあることを示唆している。そこで、本節では、『今昔物語集』にみられるキサグ・クジル・エル及びその複合語の用例(異訓のある字を除く)及び平安～鎌倉期の作品の用例を用いて各訓の意味分析を行い、相互の意味的な連関(異同)を明らかにする。意味分析の手法は、野林(1997)を参考にした。

#### 3.1. 意味分析の方法

次掲の「意味分析表」を参照されたい。列の左側より意味分類番号(I～IV)、用例番号(1～47)、各用例を置く。各用例は、『今昔物語集』の「髣」「髴」の字による用例を除く例及び主として平安から鎌倉期の散文作品から収集したもので、キサグ・クジル・エルの意味に関わって状況を示す表現を含む文(の一部)である。用例の右側の列にキサグ・クジル・エルの意味に関わる2-a～4の意義を置く。1-a, 1-bは、すべての用例にあてはまる共通項としての意義であるので、表の上では省いてある。

各用例についてある意義が認められるかどうかをチェックし、ない場合は「—」印、ある場合はその項目の略称(例：一方向動作→一方向)を入れてある。ややその傾向が認められる場合は略称右に△印を付した。

ある用例について表を横に見たとき現れる意義の一つ一つは、その用例の語（キサグ・クジル・エル）が用いられるときの複数の着眼点といえる。意義の束は、着眼点の複合であり、多様な事態（ここでは動作）がこの複合によって関連をもって分類される。ある語の「意味」は、おのおのの意義の束によって捉えられたある状況に対応している。

二一(2) 意味分析表―「キサグ・クジル・エル」(栗原さよ子作成)

意味	用例番号	訓	用例	意義						出典
				動作目的		動作性			目的物	
				2-a	2-b	3-a	3-b	3-c	4	
			用例	利用にかなう形状	到達のための深さ	一方向性動作	多方向性動作	動作の繰り返し	目的物分離	
I	1	キサグ	爾(に) 蛭貝比壳、 <b>岐佐宜</b> (キサゲ) 集(めて)	形状	—	一方向	—	繰返	分離	古事記(712)上
I	2	キサゲキル	犀角・零羊【カマシ】角、皆 <b>刮【キサケ】</b> <b>截【キ】</b> 作屑	形状	—	一方向	—	繰返	分離	医心方天養二年点(1145)
II	3	クジル	重キ咎有テ、波斯匿王此ノ群賊ヲ皆捕ヘテ、各日 <b>攫</b> リ手足ヲ切テ、高禪山ト云フ山ノ扶ニ追ヒ棄タリ。	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻1・38話)
II	4	クジル	彼ノ太子ノ眼ヲ <b>抉</b> シ所ハ、徳叉尸羅國ノ外、東南ノ山ノ北也。	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻4・4話)
II	5	クジル	(前略) 遠助ガ出タル間ニ、妻蜜ニ箱ヲ取下シテ開テ見ケレバ、人ノ目ヲ <b>攫</b> テ数入レタリ。	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻27・21話)
II	6	クジリスツ	「速ニ太子ノ二ノ眼ヲ <b>抉</b> リ <b>捨</b> テ、太子ヲ國ノ境ノ外ニ可追却シ」	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻4・4話)
II	7	クジリスツ	「我が二ノ眼ヲ <b>抉</b> リ <b>捨</b> テ我レヲ可追シ」	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻4・4話)
II	8	クジリスツ	(前略) 忽ニ旃荼羅ヲ召テ哭々ク二ノ眼ヲ <b>抉</b> リ <b>捨</b> ツ。	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻4・4話)
II	9	クジリスツ	(前略) 父ノ大王ノ宣旨ニ依テ、二ノ眼ヲ <b>抉</b> リ <b>捨</b> テ國ノ境ヲ追ヒ出サレタレバ、(後略)	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻4・4話)
II	10	クジリトル	其ノ目極テ善カリツレバ、 <b>抉</b> リ <b>取</b> テ爰ニ持来タリ。	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻4・22話)
II	11	クジリトル	夫捕ヘテ膝ノ上ニ曳キ臥セテ、眼ヲ <b>抉</b> リ <b>取</b> テ、身ヲバ大路ニ曳捨ツ。	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集(巻4・22話)
II	12	クジル	截【キ】レ(り) 耳(を) 截【キ】レ(り) 鼻(を) 挑【クジ】(り) レ眼(を) —【】内ハ訓	—	深さ	一方向	—	—	分離	岩淵本願經四分律平安初期点(810頃)

II	13	ホリクジル	この馬のしわざにやとて、壁にかきたるに馬の目を <b>ほりくじり</b> てけり。	—	深さ	一方向	—	—	分離	古今著聞集・11・385 (1254)
II	14	クジル	烏しだいにつゝきて、うへにのぼりて、目を <b>くじら</b> むとしけるとき	—	深さ	一方向	—	—	分離	古今著聞集・20・697
II	15	クジル	(前略) 眼ヲ <b>抉</b> テ婆羅門ニ施シ、血ヲ出シテ婆羅門ニ飲シメ、如此クノ有難キ事ヲソラ施シ給フ。	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語 (巻4・17話)
II	16	エル	判官代ヲ馬ヨリ引キ落シテ、刀劍ヲ以テ切り、弓箭ヲ以テ射、棒ヲ以テ貫キ、足ヲ切り、手ヲ折り、目 <b>彫</b> リ、鼻ヲ削リ、口ヲ割キ、段々ニ其ノ身ヲ殺シ伏セツ。	—	深さ	一方向	—	—	分離	今昔物語集 (巻16・3話)
III	17	クジル	闇の夜に出て、穴を <b>くじり</b> 、かひ間見、まとひあへり。	—	深さ	一方向	—	—	—	竹取物語 (9c末～10c初)
III	18	クジル	(前略) 神ナラバヨモ刀モ立ジヤ。腹ニ突立テ試シ」ト云テ、座許 <b>摺</b> ル様ニスルニ、猿叫テ手ヲ摺ニ、(後略)	—	深さ	一方向	—	—	—	今昔物語集 (巻26・8話)
III	19	クジリトホス	池ニハ楯ト云フ物ヲ立テ、打樋ヲ構テ水ヲバ出セバコソ、池ハ持ツ事ニテハ有ルニ、此レハ堤ヲ <b>摺通</b> シテケレバ、漸ク其ノ穴顔レテ広ク成ケル程ニ、(後略)	—	深さ	一方向	—	—	—	今昔物語集 (巻31・22話)
III	20	クジル	かべの穴いさゝかありけるを、 <b>くじり</b> て、「ここもとに寄り給へ」と呼び寄せて	—	深さ	一方向	—	—	—	篁物語 (10c末)
III	21	エル	次ニ鉦ヲ取テ持来タリ。天井ニ穴 <b>彫</b> タリケリ。	—	深さ	一方向	—	—	—	今昔物語集 (巻29・13話)
IV	22	エル	心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を <b>え(ゑ)り</b> て、(後略)	形状	—	—	多方向	繰返	—	源氏物語・梅枝 (1001～1014)
IV	23	エル	<b>彫(エ)レル</b> 楹 (ハシラ)、鏤 (チリハ) メタル。	形状	—	—	多方向	繰返	—	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点3-299 (1099)
IV	24	エリホル	工匠與往 (キ) テカヲ畫 (シ) テ <b>鏤(エ)リ鑿(ホ)ル</b> コト凡 (ヘ) テ一旬ヲ經、	形状	—	—	多方向	繰返	—	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点4-36
IV	25	エル	二序 (ノ) 文 (ヲ) [於] 金石 (ニ) <b>鏤(リ)テ</b>	形状	—	—	多方向	繰返	—	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点7-52
IV	26	エル	豊碑ヲ樹 (テ) テ斯 (ノ) 序記 (ヲ) <b>鏤(ヨ→注にエの誤とある)ラム</b> トス	形状	—	—	多方向	繰返	—	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点7-288
IV	27	エリトル	人へ仏を見奉れば、左右の股を新しく <b>彫り取り</b> たり	形状	—	—	多方向	繰返	—	古本説話集・下・53 (1130年頃か)

IV	28	エル	塔ヲ立ル功德ハ、只戯レニ石ヲ重ネ、木ヲ彫タルソラ不可思議ナル者也。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻4・3話)
IV	29	エル	大王婆羅門ノ云ガ如ク身ニ千所ノ疵ヲ彫テ、其レニ完ノ油ヲ滴テ、上妙ノ細畳ヲ以テ灯心トシテ火ヲ付テ燃ス。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻5・9話)
IV	30	エル	(前略) 王ノ御身ニ千所ノ疵ヲ彫テ、其レニ完ノ油ヲ滴テ、灯心ヲ入レテ燃シテ供養セバ、(後略)	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻5・9話)
IV	31	エル	恵明、具ニ此ノ事ヲ記シテ、石ヲ彫テ納メテケリ。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻7・24話)
IV	32	エル	御手ヲ折テ前ニ棄テ、御足ヲ切テ傍ニ置キ、御眼ヲ彫リ、鼻ヲ削リ奉レリ。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻16・3話)
IV	33	エル	其ノ後、僧彼ノ猿誂ヘシ法花経ヲ不書畢ズシテ、仏ノ御前ノ柱ヲ刻テ籠メ置キ奉ツ。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻14・6話)
IV	34	エル	(前略) 蕪ノ根ノ大ナルヲ一ツ引テ取テ、其ヲ彫テ、其ノ穴ヲ娶テ姪ヲ成シテケリ。	形状	—	—	多方向 △	繰返	—	今昔物語集(巻26・2話)
IV	35	エル	「此ニ穴ヲ彫タル蕪ノ有ゾ。(後略)	形状	—	—	多方向 △	繰返	—	今昔物語集(巻26・2話)
IV	36	エル	(前略) 大キナリシ蕪一ツヲ取テ穴ヲ彫テ、其レヲ娶テコソ、本意ヲ遂テ垣内ニ投入テシカ」ト云ケルヲ、(後略)	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻26・2話)
IV	37	エル	その後、經をばかきおはらずして、寺の佛前の柱を彫りて、その中に奉納してさりぬ。	形状	—	—	多方向	繰返	—	古今著聞集・20・680
IV	38	エル	井上ノ内親王ヲ穴ヲ掘リテ獄ヲツクリテコメマイラセナンドセシカバ	形状	—	—	多方向	繰返	—	愚管抄・7(1220)
IV	39	エリアラハス	此寺ハ、弥勒彫顯シ奉テ後、程ヲ経テ、良弁僧正ト云フ人ノ見付ケ奉テ、其後ヨリ行ヒ始タルゾト人云フ。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻11・30話)
IV	40	エル	皇子心ニ思ヒ煩テ、山ノ腹ヲ指テ、其面ニ弥勒ノ像ヲ彫リ奉ラムト為ルニ、力無シ。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻11・30話)
IV	41	エル	其時ニ、皇子仰テ巖ノ上ヲ見給フニ、弥勒ノ像、其形チ鮮ニシテ彫リ奉リタリ。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻11・30話)
IV	42	キザミエル	其時ニ、天人是ヲ哀ビ助ケテ、忽ニ此仏ヲ刻ミ彫リ奉ル。	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語(巻11・30話)
IV	43	エル	舟ヲ割(工)リ、木ニ絃(ツル)ハケテ天下ヲ威(リシメテ)	形状	—	—	多方向	繰返	—	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点6-153

IV	44	エル	用テ豊琬ヲ彫(リテ)長ク茂則ヲ垂(ル)、	形状	—	—	多方向	繰返	—	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点 9-33
IV	45	エル	「蜜ニ此ノ後ロノ海ノ辺ニ有ル大ナル松ノ木ヲ伐テ、此レヲ船ノ形ニ刻テ、其レニ乗テ蜜ニ此ヲ出デハ、(後略)」	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻16・2話)
IV	46	エル	(前略) 八人シテ此ノ木ヲ伐テ忽ニ刻リツ。此ニ乗テ、此ノ観音ノ像ヲ船ノ内ニ安置シ奉テ、(後略)	形状	—	—	多方向	繰返	—	今昔物語集(巻16・2話)
IV	47	エル	「いかゞこれ程の重寶をさうなうは <u>ゑら</u> すべき」とて、三井寺の大進僧正覚宗に仰て、壇上にた(ッ)て、七日加持して <u>ゑら</u> せ給へる御笛也。	形状	—	—	多方向	繰返	—	平家物語・4・大衆揃(13c前)

※意義 1a, 1b は、すべての用例の動詞が例外なく有するので、表の上では省略する。

### 3.2. 各「意義」の内容

抽出された「意義」は以下の通りである。

- 1 道具と対象
  - 1-a 道具使用
  - 1-b 対象物の有無
- 2 動作目的
  - 2-a 利用にかなう形状
  - 2-b 到達のための深さ
- 3 動作性
  - 3-a 一方向性動作
  - 3-b 多方向性動作
  - 3-c 動作の繰り返し
- 4 目的物分離

次に各「意義」について説明する。

#### 3.2.1. 道具使用・対象物の有無

キサグ・クジル・エルは互いに類義の動作動詞である。互いの意味の共通項として見出されたのが、1-a「道具使用」と1-b「対象物」である。いずれの語も、人が道具(指も道具の一つとみなされる)を用いて対象となる物に変化を加えるという状況に用いられうる。どのように道具を用いるかについては、他の意義が明らかにする。

#### 3.2.2. 動作目的

道具を使った動作の目的に関わる意義である。2-a は、動作の目的が、対象物の形状を目的に沿って何らかに変化させることにあるとみられるもの、2-b は、動作の目的が、対象物に

目的到達のための深さまで変化を加えることにあるとみられるものである。

2-a の例としては、(36) のエルの例が挙げられよう。もらった竹で笛を作るという場面である。動作目的からして笛の形状そのものが問題であり、深さという要素は考慮されない。

(36) 七日加持してゑらせ給へる御笛也 (平家、用例番号 (以下、番号) 47)

2-b の例としては、(37) のクジルの例が挙げられる。かべに穴をあけて向こう側の人物と話をするという場面である。この場合、穴の形状そのものに注意は払われにくく、貫通するまでの深さが問題である。

(37) かべの穴いさゝかありけるを、くじりて、「こゝもとに寄り給へ」と呼び寄せて (後略) (篁物語、番号 20)

### 3.2.3. 動作性

類義の 3 語の動作は、錐状の道具、ナイフ状の道具などで深く、あるいはある形状に対象物を変化させるのであるが、その具体的な動きには 3-a, b, c の三つにパターン化できる要素が見出される。

**3-a 「一方向性動作」** は、目的を達するための深さが問題となる状況で現れやすい。ある一定の方向に向かって動作を継続する。(38) がその一つの例である。眼をクジルためには、顔に対してほぼ垂直方向に目的の深さまで道具を入れると考えられる。

(38) 父ノ大王ノ宣旨ニ依テ、二ノ眼ヲ抉り捨テ国ノ境ヲ追ヒ出サレタレバ (番号 9)

**3-b 「多方向性動作」** は、目的を達するための形状が問題となる状況で現れやすい。(36) のように、ある動作を様々の方向に、あるいは様々の箇所で作る必要があるのが典型的な状況である。

(36) 七日加持してゑらせ給へる御笛也 (平家、番号 47)

**3-c 「動作の繰り返し」** は、あるパターン化された動作が目的達成まで繰り返し行われるとみなされるかどうかという意義である。(36) では、繰り返しの動作と見なされるが(37) では、繰り返しのない (一回性の) 動作とみなされる。(36) は、刃物状の道具で様々な箇所を繰り返し彫るような動作が想像されるが、(37) は、かべにみつけた穴をさらに道具で貫通させる (大きくする) という場合、パターン化される動作の繰り返しは、考えにくい。ぐいぐいと深く連続的に道具を差し込んでいくような動作ではないか。

(36) 七日加持してゑらせ給へる御笛也 (平家、番号 47)

(37) かべの穴いさゝかありけるを、くじりて、「こゝもとに寄り給へ」と呼び寄せて (後略) (篁物語、番号 20)

### 3.2.4. 目的物分離

「目的物分離」は、結果としての目的物が、動作前の対象物から分離するかどうかに関わ

る意義である。(36)の例では目的物は分離していないが、(39)では、変化前のかたまりから分離した「屑」が目的であって、「屑」でない残った角のかたまりは、目的物ではないことに注意されたい。

(36) 七日加持して羂らせ給へる御笛也 (平家、番号 47)

(39) 犀角、零羊【カマシシ】角、皆刮【キサケ】截【キ】作屑 (医心方天養二年点、番号 2)

以上の意義の束によって、47例の用例を分析した結果、状況パターンとして、意味Ⅰ～Ⅳが見出された。それらを以下で考察する。

### 3.3. 用例の意味分類

意味Ⅰ～Ⅳを意義によって以下にまとめる。意義Ⅰ(道具と対象)は、すべての用例に該当する(共通項である)ので省く。右端( )内に該当する用例の語を挙げ、その後に用例数を付す(キサグ、クジルの複合語は、キサグ・クジルに含める)。さらに下の行に典型的な具体的状況を仮に表現しておく。

意味Ⅰ：2 [利用にかなう形状]、3 [一方向性動作] [動作繰り返し]、4 [目的物分離] (キサグ 2例)

《硬いものを削って粒・粉を作る》

意味Ⅱ：2 [到達のための深さ]、3 [一方向性動作]、4 [目的物分離] (クジル 13例、エル 1例 (番号 16))

《顔から目をえぐる (えぐりとる)》

意味Ⅲ：2 [到達のための深さ]、3 [一方向性動作] (クジル 4例 (番号 17～20)、エル 1例 (番号 21))

《壁などに貫通した穴をあける》

意味Ⅳ：2 [利用にかなう形状]、3 [多方向性動作] [動作繰り返し] (エル 26例)

《ある形状のものを削ったり彫(掘)ったりして作る》

意味Ⅰはキサグのみが該当した。意味Ⅱと意味Ⅲは、クジルが主だが、例外的にエルも1例ずつ該当した。意味Ⅳは、エルの用例のみである。以下では、それぞれの意味を具体的に用例を挙げながらみていく。

#### 3.3.1 意味Ⅰ 《硬いものを削って粒・粉を作る》

前掲の(39)や下の(40)の用例内容から明らかなように、貝や角といった非常に硬いものを恐らくは鋭利な道具で削るようにしたと思われる。削って粉や粒状になったものが目的物である(意義4 [目的物分離])。この場合、動作の目的は、目的の深さまで動作するのではなく、対象物を形状変化させる、つまり「かたまり」から「細かい粒状、粉状」にすること

にあるとみられる（意義2 [利用にかなう形状]）。貝や角を削るような動作は、通常、一方  
向に繰り返しなされる傾向が強いものと思われる（意義3 [一方向性動作]）。

(40) 爾（に）蜃貝比壳、**岐佐宣**（キサゲ）集（めて）（古事記、番号1）

### 3.3.2. 意味II 《顔から目をえぐる（えぐりとる）》

意味IIに該当する用例は、「目」を取り出す状況を描いている。従って、目的物（目）が  
対象物（顔）から分離する（意義4 [目的物分離]）。ほとんどが人間の目であるが、(41)  
のように壁に描かれた「馬の目」もある。

具体的動作としては、顔に対して垂直に道具を入れることが想定される（意義3 [一方向  
性動作]）。この場合、目を取り出すのに十分な深さが重要である（意義2 [到達のための深  
さ]）。

意味IIにはクジルのほか、複合語のクジリスツとクジリトルとホリクジルがある。いずれ  
の場合も、目を顔から取り出すプロセスであるが、クジリスツでは、「クジリー」に目を取  
り出すまでのプロセスが意味的に含まれている。しかしクジリトルの「クジリー」は取り出  
すまでのプロセスは含まれず、取り出すことの意味は「一トル」が担っていると考えられる。  
ホリクシルは、描かれた馬の目を壁からほって取り除く意味で用いられたのであろう。

(38) 父ノ大王ノ宣旨ニ依テ、二ノ眼ヲ**抉リ捨テ**国ノ境ヲ追ヒ出サレタレバ、(番号9)

(41) この馬のしわざにやとて、壁にかきたるに馬の目を**ほりくじり**てけり（著聞集、番  
号13）

(42) はエルが意味IIで用いられた例である。

(42) 判官代ヲ馬ヨリ引キ落シテ、刀劍ヲ以テ切り、弓箭ヲ以テ射、棒ヲ以テ貫キ、足ヲ  
切り、手ヲ折り、目**彫リ**、鼻ヲ削リ、口ヲ割キ、段々ニ其ノ身ヲ殺シ伏セツ。(番号  
16)

エルは意味IVの状況で用いられやすいが、意味IIで用いられる理由は明らかでない。但し、  
後続文で仏の体が、判官代がされたと同じように傷ついていたのが分かった場面で、(43)  
の描写がある。

(43) 御手ヲ折テ前ニ棄テ、御足ヲ切テ傍ニ置キ、御眼ヲ**彫リ**、鼻ヲ削リ奉レリ。(番号  
32)

書き手は、(42) の場面でも、人間でない仏の像が傷つけられた状態、つまり目を浅くえ  
ぐる、あるいは削り取る様子を想定したのかもしれない。しかし、そうだとすると意義2の  
[利用にかなう形状] が問題にならないとすると意味IVに含めることも難しい。

### 3.3.3. 意味III 《壁などに貫通した穴をあける》

用例 (37)、(44) のように、ある壁などの側面に穴をあける例がほとんどである。

(37) かべの穴いさゝかありけるを、くじりて、「こゝもとに寄り給へ」と呼び寄せて（篁物語、番号20）

(44) 池ニハ槌ト云フ物ヲ立テ、打樋ヲ構テ水ヲ出セバコソ、池ハ持ツ事ニテハ有ルニ、此レハ堤ヲ掘通テケレバ、漸ク其ノ穴類レテ広く成ケル程ニ（番号19）

このような場合、道具を概ね一方向に、目的を達するまで深く（対象物に垂直に）動かしていくであろう。この動作目的（意義2 [到達のための深さ]）及び動作性（意義3 [一方向性動作]）については意味Ⅱと共通である。

異なるのは、目的の対象物が「目」のように分離するのではない点である。

(44) も穴であるが、堤に水を通す穴を掘るという状況である。このような大きな穴の場合は、個々の動作は、繰り返し性があり、現代でいうシャベル状の道具などで穴の上下左右の土を取り除いていくのであろう。しかし、描写の仕方は、ミクロ的に個々の動作を描いているのではなく、「クジリトホス」という表現によって、目的達成に必要な深さまで掘り進む比較的長い時間のプロセスを一つの動作として捉えているものと思われる。従って、穴を一方向に、貫通するまで掘り進むということは意義2では [到達のための深さ]、意義3では、[一方向性動作] となる。

5例中4例はクジルが用いられているが、(45) は、唯一エルの例である。天井に作った穴から鉾をさしおろす目的があることから、対象物の形状よりも深さが問題ではないだろうか（意義2 [到達のための深さ]）。なぜこの状況でクジルでなく、意味Ⅳに多いエルが用いられているのか明らかでない。天井という対象物の性質上（天井が薄い）、穴の形状により視点が置かれたのだろうか。

(45) 次ニ鉾ヲ取テ持来タリ。天井ニ穴彫タリケリ。（番号21）

### 3.3.4. 意味Ⅳ 《ある形状のものを削ったり彫（掘）ったりして作る》

意味Ⅳは、エルのみが該当する。ある形状のものを作るのに、目的を達するためには深さではなく形状が問題となる（意義2 [利用にかなう形状]）。形状の種類には、いくつかある。パターン化して示すと、①浅いくぼみを彫るタイプ（番号22～32）、②ある程度深い穴を彫るタイプ（番号33～38）、③ある形状の作品を彫るタイプ（番号39～47）である。

浅いくぼみを彫るタイプ（①）の一例は、(46) のような用例である。(46) は、ある内容、具体的には字を石に彫ることである。

(46) 恵明、具ニ此ノ事ヲ記シテ、石ヲ彫テ納メテケリ。（番号31）

ある程度深い穴をほるタイプ（②）は、(47) のような例である。

(47) 井上ノ内親王ヲ穴ヲエリテ獄ヲツクリテコメマイラセナンドセシカバ（愚管抄、番号38）

この場合、出来上がった穴は、獄として利用される目的があるので、意味Ⅱ、Ⅲの意義で

ある [到達のための深さ] より、どのような形状、大きさの穴かが問題になると思われる (意義2 [利用にかなう形状])。

更に意味Ⅲでみられた、壁にあける「穴」(貫通して側面の向こう側と空間が連続する)と比較すると、意味Ⅳの「穴」は、貫通しない「底のある穴」がほとんどである。つまり日本語の「あな」は、(48)、(49)の例文から分かるように二つのタイプの「あな」を意味する。

(48) 壁に穴をあける。(貫通する穴)

(49) 地面に穴を掘る。(底のある穴)

ある形状の作品をほるタイプ (③) とは、例えば (50) のような例である。

(50) 蜜ニ此ノ後ロノ海ノ辺ニ有ル大ナル松ノ木ヲ伐テ、此レヲ船ノ形ニ刻テ、其レニ乗テ蜜ニ此ヲ出デ、(番号45)

(50) は、松ノ木を船の形に作ることである。ほかに笛 (番号47)、豊琬 (「琬」は、かどのない圭。(天子が有徳の諸侯を称するとき用いる宝石。))『新撰漢和辞典 新版』(番号44)を作る例がみられた。このような作品の場合、典型的な「あな」はできないが、彫ることのできるくぼみ、へこみも、浅くはあるが、「底のある穴」と同種の形状とみなすことができる。

①から③のいずれのタイプにせよ、意味Ⅳの状況における動作は、ある形状に仕上げるために、道具を上下左右、いろいろな角度に動かしながら、何度も同じ動作を繰り返すとみられる (意義3 [多方向性動作] [動作の繰り返し])。

#### 3.4. 用例分類のまとめ

全47例は、3項目6種 (意義1は除く) の意義によって4つの意味に分類された。意味は、意義の束によって互いの連関を明らかにされ、ある語が用いられる状況を示している。以下のように、おおよそ状況のパターン (意味Ⅰ～Ⅳ) にそれぞれの訓、キサグ・クジル・エルが対応している。

意味Ⅰ→キサグ

意味Ⅱ・Ⅲ→クジル

意味Ⅳ→エル

意味Ⅱと意味Ⅲは、意義4 (目的物分離) のみが異なっている、かなり意味の類似性の高いものである。意味Ⅱ、意味Ⅲそれぞれにエルの用例が一例ずつあることについては、今後の検討課題としたい。また、意味Ⅰに該当するキサグの用例が少なかったため、今後用例がさらに収集・分析されることが望ましい。平安～鎌倉期のキサグの使用実態がどうであったか (死語化に向かっていたか) なども考察の余地がある。

#### 4. 巻26・14話の「甍」が表わす状況と妥当な訓の推測

##### 4.1. 場面状況の推測

巻26・14話の「甍開テ」、「甍テ」の現れる箇所状況を推測・判断し、3で分析した各訓の意味のいずれに合うかを検討し、妥当な訓を推測する。

まず考察に必要な箇所を掲げる。頁、行は新大系による。

(51) 主此ヲ見ニ、可為方覚エザリケレバ、底ハ白砂ニテ、浅キ小河ノ流タリケルニ下立テ、鞭ノ崎ヲ以テ、水ノ底ノ砂ヲ此彼搔立リケレバ、鞭ノ崎ニ黄ナル物ノ有ケルヲ、何ゾト思テ搔廻スニ、円ナル物ニテ鞭ノ被廻ケレバ、和ラ砂ヲ搔去テ促レテ見ニ、小瓶ノ口ニ見成シツ。

「瓶ニコソ有ケレ。人ノ骨ナドヲ入テ埋ミタリケルニカ」ト、氣六借ク思エケレドモ、構テ甍開テ瓶ノ内ヲ見ニ、金ヲ一瓶入テ埋ケルヲ見付テケレバ、(中略)此瓶ヲ和ラ拔出テ、極テ重キヲ念ジテ懷ニ引入テ、衣ノ袖ヲ絶、腹ニ結付テ後、従者共ノ許ニ歩ミ寄テ云ク、(後略) (62頁10～15行)

(52) 然テ居所ニ返テ、皮子開テ、小瓶ノ口ヲ甍テ、金百両ヲ取出シテ持行テ、(64頁3行)

当該箇所が表現している描写内容について主に62頁10～15行の方を考察してみる。描写に不明な点が残るが、(小)瓶の形状・大きさ、口の形状・大きさ、口を塞いでいた物の素材や形状、「キサグ・クジル・エル」のために使った道具(素手)などが問題だと考えられる。これらの点について、以下のA～Cのようなことが推測される。

- A) (小)瓶の大きさ：人が抱えられるくらいの大きさ。
- B) 口の形状：広口(「かめ」は一般に「つぼ」に比べて口が広い)。
- C) 口を塞いでいた物：当時一般的なのは、カメと同じ材質の「焼きもの」や「木」のふた、和紙を被せて紐でしばるといったもの。しかし、瓶の蓋は、現代のピンの蓋のようなしっかりと固定して本体から離れない蓋ではなく、和紙を紐で縛る以外は、容易に蓋がずれたりはずれたりするものであろうから、当該箇所の内容からは、蓋はすでになく、水中で土か砂が入り込んでいたのではないかと推測される。

「甍開(アク)」の動作を、上のようなことを前提に推測する。「円ナル物」は「小瓶の口」であって「蓋」でないことが注目される。「蓋」がない状態とすれば、砂の中から瓶の口がまず見つかって(瓶本体がどれくらい見えていたかは不明)それをキサグ/クジル/エルということをして、そのあと瓶本体を(川底から)抜き出したことになる。

瓶の口は、蓋でなく、砂か土で塞がれていたと推測するのは、キサグ・クジル・エルのいずれの意味から考えても不自然ではないと思われ、逆に、材料が陶器であっても木であっても和紙であっても、その蓋を取るための動作としては問題の三つの訓は、すでに意味分析した内容から分かるとおり、ふさわしくないものと思われる。さらに、複合動詞「～アク」の

アクの意味からも、蓋がない状況を想定することは可能である。『日本国語大辞典 第2版』では、

(53) あける【明・開・空】

- ① 隔てや、おおいなど、ふさいであるものを除く。閉じてあるものを開く。
- ② そこを占めているものを取り除く。

イ) ふさいでいるものを除いたり、間を広げたりして空間や時間の間隔をつくる  
（「心なし、道あけ侍りなんよ」源氏・蜻蛉、「此櫃を、刀のさきして、みそかにあなをあけて」宇治拾遺 10）。

ロ) 中に入っているものや人を外に出す。出してからにする。また、器の中のを他に移す（「ウツワモノヲ aquru」日葡辞書）。

とあり、②のイ) またはロ) の意味では、土のようなものを取り除く意味でアクが使えるものと思われる。

#### 4.2. 訓の推測

本分析では、瓶の中に土あるいは砂が入っていたと判断し、それを取り除く動作を中心に考察をすすめる。

手にしていたのは「鞭」であるが、鞭の先で行ったのか素手で行ったのかあるいは別の道具を使ったのか定かでない。いずれにしても、砂か土が瓶の内部のある程度の深さまで入り込んでいたと考えられる。それを見て登場人物は、骨でも入っているのかと思う。そこで土・砂を取り除こうとする。すなわち動作目的は、中に入っているものが確認できる（見える）までの深さに土・砂を除去することであり、瓶あるいは瓶の中の土・砂をどういう形状に作るかということではない（意義2 [到達のための深さ]）ことが推測される。この場面では、「ほる」ような動作が行われたのではないか。したがって動作は、[一方向性動作]（意義3）と考えられる。ここまでの条件を考慮すると、この状況は、意味Ⅲに最も近い。

ただ、壁などと異なり、瓶の中の土・砂は「軟らかい」、「厚みがある」といった特徴があるため、何度も道具を差し入れて、土・砂を取り除いたと考えると [動作の繰り返し] の意義が認められうる。そうだとすると、意味Ⅲの典型的な《壁などに貫通した穴をあける》とはずれがある。しかし、

意味Ⅰ（キサグ）の《硬いものを削って粒・粉を作る》：意義2 [利用にかなう形状]、意義4 [目的物分離]

意味Ⅱ（目をクジル）の《顔から目をえぐる（えぐりとる）》：意義4 [目的物分離]

意味Ⅳ（エル）の《ある形状のものを削ったり彫（掘）ったりして作る》：意義2 [利用にかなう形状]、意義3 [多方向性動作]

との不一致と比較すると、意味Ⅲに近似の状況と捉えるのが最も妥当であると思われる。

意味Ⅲの典型的な状況を抽象化すると、「目的を達するまでほる」という動作目的及び動作が浮かび上がるが、問題の場面は、それに合致するからである。さらにいえば、金が見つかったところが壁でいえば貫通しきったところであり、目的の深さに到達したという点では、「貫通」と通じる状況であると考えてよい。

尚、巻26・7話でも、「髯」（新大系、キサゲー）あるいは「髯」（旧大系、クジリー）の字が用いられている箇所がある（(54)）。ここは、『宇治拾遺物語』下119に同じ説話があり、『今昔』の(54)に対応する箇所は、(55)のように表現されている。

(54) 男、長櫃ヲ塵許髯開テ見レバ、長七八尺許ナル猿、横座ニ有リ。(新大系。旧大系では「髯」と表記。)

(55) さる程に、この櫃を、刀の先してみそかに穴をあけて、あづま人見ければ、まことにえもいはず大きな猿の、丈七八尺ばかりなる、(中略)横座に寄り居たり。(新大系)

『今昔』で「長櫃ヲ塵許髯開テ」の箇所は、『宇治拾遺物語』では、「この櫃を、刀の先してみそかに穴をあけて」と表現されており、比較的薄い側面を刀の先を使って恐らくは、錐で穴をあけるような動作を行ったのであろう。結果、「貫通した穴」ができたことになる。この通りの描写を『今昔』でも意図していたとすると、(54)の「髯開テ」の意味は、クジルの例が多い意味Ⅲにあたる。このことは、問題の「髯」、「髯」の字がどのような意味で使われるかを考える上で、一つの有力なデータである。

時間を経た後、皮子から瓶を取り出す場面の(52)についても推測してみる。もし、皮子から取り出した瓶にまだ土・砂がそのまま残っていたとしたら、一連の動作は、瓶が水中にある(51)の場面と基本的に同様であつたろうと推測される。そしてその可能性が高い。なぜなら、もし土・砂を除去してあつたら、類義の三つの動作動詞キサゲ・クジル・エルのいずれも必要ない動作ということになる。単に金百両をつかむ、すくうなどして取り出したであろうからである。

以上のことをまとめると、(51)、(52)から推測される動作は、意味Ⅲの典型的状況に最も近く、キサゲ・クジル・エルのうち、意味Ⅲに該当する用例に多かったクジルが最も妥当であると推測される。従って、「髯」はクジルの訓であると考えるのが最も妥当ではないかと思われる。

巻26・14話と共通の意味Ⅲの意義

意義1a [道具使用]

1b [対象物]

2b [目的を達するための対象の深さ]

3a [一方向性動作]

4 [目的物分離]

巻26・14話と異なる可能性がある意味Ⅲの意義

## 5. まとめ

本稿では、『今昔物語集』の中でキサグ・クジル・エルの3訓で揺れている「髒」について、意味分析の結果に基づいて最も妥当と思われる訓を推測した。

意味分析の結果から、巻26・14話の「髒」の出現箇所が表現する状況は、意味Ⅰから意味Ⅳの状況のうち、意味Ⅲに最も類似することが推測された。意味Ⅲに該当した5例のうち多くはクジルの訓であるので、「髒」もクジルと訓ずる妥当性が高いと思われる。ただし、意味Ⅲにはエルの例も1例あったので、それについては今後、精査していきたい。

また、「髒」について、漢字そのものの問題（異体字など）としても検討していきたいと考えている。

## 三 おわりに

本稿では、『今昔物語集』巻26について、5つの注釈書における訓釈の異同一覧表を提示し、そこで訓にゆれのある語彙について、中古・中世の用例と比較しながら、語義を検討しつつ、『今昔』での訓を考察した。2つの語彙とも用例が少ないものであったので未詳部分もなお残ったが、より妥当な訓の可能性と従来より詳しい語義の考察ができたと思われる。

2—(1) では、次のような語史が明らかになった。

「ツツメク→ツツヤク（云々）→（中世・慣用化）ソソヤキツツヤク→ササヤキツツヤク・ツツヤキササヤク」

また、ツツヤク単独用法は「云々」という表記と強く結びついていて一時的ないしごく限定された使用がうかがえること（古辞書と今昔）、中古語彙としてはツツメク、中世語彙としてはツツヤク（ないしその複合表現）という時代的交代が見取れ、『今昔』はその交代時期にあること、『今昔』の事例は、中古語と見れば「頭当ツツメク」もあるので中古語ツツメクで読む可能性もあるが、「云々」の訓としてはツツヤクが優先的に考えられるであろうこと、などが明らかになった。

2—(2) では、キサグ・クジル・エルの語義的相違がこれまで以上に細分化して解釈可能となった。『今昔』の当該箇所では、意義分析からはクジルの可能性が高いと推定された。その結論については、今回紙幅の都合で割愛しているが、髒とその異体字関係にある漢字およびこれらの訓をもつ種々の異体字における訓と意味用法に関する調査からも、髒がクジルと読まれる可能性が高いことが裏付けられる（栗原調査、その報告は機会を改める）。また、キサグの意味に《硬いものを削って粒・粉状にする》がより明確に指摘できたが、そのことは、その語源として、キザーム・コソーグという、形態上「k—s(z) —動詞化接尾辞」と

いう共通性が指摘でき、それらの語形とも同源性が高いことが見通せることとなる。つまり、これらキサグ・キザム・コソグは、

祖形「\*k—s—(グ・ム)」→キサグ・キザム・コソグ

という異形態関係にある同源類義語と把握できよう（辞書類では、『小学館古語大辞典』「こそぐ」（語誌：田島毓堂氏）が、「きさぐ」は「こそぐ」に転じたと解する）。（このほか、意味と形態から類義語のケヅルが問題となり、zとdの相違は別語源と一般にはみなされるが、『岩波古語辞典』「きざむ」では語源として「キザはキダ（段・分）と同根。区切りをつけて、切り分ける意」として、ザ行—ダ行で異なるキダ（段・分、切れ・刻み目）を同源に挙げているのは、キダハシ・キザハシ（階・段）の異音関係の存在とも併せると、極めて示唆的である。）

それらを視野に入れば、今回は『今昔』での異訓がなかったので取り上げなかった類義語ウガツ・キザム・ケヅル・コソグ・ホルなど、いわば《掘削》語彙の比較は、また次の課題でもあることとなる。

今後も、古代語の語彙と文体の史的研究として、また、『今昔』の研究として、今回のような研究を継続していくことが必要と思われる。今回提示した訓訳異同表はそのような研究のためにも有効であろう。『今昔』巻26の他の異同箇所や他の巻についても、今後継続して取り上げていく予定である。

## 【2—(1)「ツツメク・ツツヤク」参考文献】

- 遠藤嘉基・春日和男（校注）（1967）『日本靈異記』（日本古典文學大系 70）岩波書店  
 出雲路修（校注）（1996）『日本靈異記』（新日本古典文学大系 30）岩波書店  
 中田祝夫（校注・訳）（1975）『日本靈異記』（日本古典文学全集 6）小学館  
 中田祝夫（校注・訳）（1995）『日本靈異記』（新編日本古典文学全集 10）小学館  
 菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久（校注・訳）（1995）『土佐日記 蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集 13）小学館  
 萩谷朴（著）（1967）『土佐日記全注釈』角川書店  
 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進（校注・訳）（1995）『栄花物語①』（新編日本古典文学全集 31）小学館  
 岡見正雄・赤松俊秀（校注）（1967）『愚管抄』（日本古典文學大系 86）岩波書店  
 北原保雄・小川栄一（編）（1990～1996）『延慶本平家物語』本文編上 索引編上・下 勉誠社  
 橋本朝生・土井洋一（校注）（1996）『狂言記』（新日本古典文学大系 58）岩波書店  
 横山重（校訂）（1965）『古浄瑠璃正本集 第四』角川書店  
 中田祝夫・峰岸明（共編）（1977）『色葉字類抄研究並びに総合索引』風間書房  
 正宗敦夫（編纂校訂）（1954～1955）『類聚名義抄』風間書房  
 稲賀敬二・竹盛天雄・松本洋介（監修）（1999）『簡明日本文学史』第一学習社

## 【2—(2)「キサグ・クジル・エル」参考文献】

- 小林信明（編）（1974）『新選漢和辞典 新版』小学館
- 上田英代・村上征勝・今西裕一郎・樺島忠夫・上田裕一（編）（1994～1996）『源氏物語語彙用例 総索引 自立語篇 第五巻』勉誠社
- 大坪併治（1961）『訓点語の研究』風間書房「岩淵本願經四分律平安初期点」
- 岡見正雄・赤松俊秀（校注）（1967）『愚管抄』（日本古典文学大系 86）岩波書店
- 木之下正雄（1974）『源氏物語用語索引 下巻』国書刊行会
- 国広哲弥（1982）『意味論の方法』大修館書店
- 倉野憲司・武田祐吉（1958）『古事記 祝詞』（日本古典文学大系 1）岩波書店
- 高木市之助（他）（校注）（1959）『平家物語 上』（日本古典文学大系 32）岩波書店
- 築島裕（1965）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』（財）東京大学出版会
- 築島裕（1966）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 索引篇』（財）東京大学出版会
- 永積安明・島田勇雄（校注）（1966）『古今著聞集』（日本古典文学大系 84）岩波書店
- 野林正路（1997）『語彙の網目と世界像の構成 一構成意味論の方法一』岩田書院
- 堀内秀晃・秋山虔（校注）（1997）『竹取物語 伊勢物語』（新日本古典文学大系 17）岩波書店
- 正宗敦夫（編）（1935）『医心方 一』（日本古典全集）日本古典全集刊行会
- 増田繁夫・長野照子（編）（1975）『宇治拾遺物語総索引』清文堂
- 三木野紀人・浅見和彦・中村義雄・小山内一明（校注）（1990）『宇治拾遺物語 古本説話集』（新日本古典文学大系 42）岩波書店
- 宮島達夫（編）（1971）『古典対照語い表』笠間書院
- 柳井滋・室伏信助・鈴木日出男・藤井貞和・今西裕一郎（編）（1999）『源氏物語索引』（新日本古典体系別巻）岩波書店
- 柳井滋（他）（校注）（1961）『源氏物語 三』（日本古典文学大系 16）岩波書店

## 【共通参考文献】（二章の参考文献は上記を参照）

- 山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄（校注）（1961～1962）『今昔物語集』（日本古典文学大系 24,25）岩波書店
- 小峯和明・森正人（校注）（1994～1996）『今昔物語集』（新日本古典文学大系 36,37）岩波書店
- 馬淵和夫・国東文麿・今野達（校注・訳）（1972～1974）『今昔物語集』（日本古典文学全集 22,23）小学館
- 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一（校注・訳）（2000～2001）『今昔物語集』（新編日本古典文学全集 36,37）小学館
- 阪倉篤義・本田義憲・川端善明（校注）（1978～1984）『今昔物語集 本朝世俗部』（新潮日本古典集成 第29回）新潮社
- 馬淵和夫（監修）（1971～1981）『今昔物語集文節索引』笠間書院
- 馬淵和夫（監修）・有賀嘉寿子（編）（1982）『今昔物語集自立語索引』笠間書院
- 小峯和明（編）（2001）『今昔物語集索引』（新日本古典文学大系別巻 4）岩波書店
- 日野資純（2007）『『急ぎ行ク／急ぎ行ク』等の区別——今昔と源氏を中心に——』『国語と国文学』84-10、ほか日野氏の近年の今昔関係のご論文。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000～2002）『日本国語大辞典 第二版』小学館

大野晋・佐竹昭広・前田金五郎（編）（1992）『岩波古語辞典 補訂版』岩波書店  
中田祝夫・和田利政・北原保雄（編）（1983）『古語大辞典』小学館  
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）（1982～1999）『角川古語大辞典』角川書店  
諸橋轍次（著） 鎌田正・米山寅太郎（修訂）（1989～1990）『大漢和辞典修訂第二版』大修館書店  
宮島達夫（編）（1971）『古典対照語い表』笠間書院

**【付記 1】** 本稿 2 章での語義比較は、安部の指導のもと、研究会参加学生の討議を踏まえ各執筆担当者がまとめ、訓釈異同一覧表作成は次の学生が分担し、安部・伊藤が取りまとめた。

共同研究参加学生と担当

○語義比較執筆 (1) 伊藤真梨子、(2) 栗原さよ子（いずれも参加学生との討議を踏まえる）

○訓釈異同表作成＝研究会参加学生（50 音順）

大学院院生（伊藤真梨子・上原和美・栗原さよ子・塩田雄大・吉田沙織）

学部生（岩波英子・杉山愛子・姫野英理子）

**【付記 2】** 本稿は、次の科学研究費による研究成果の一部でもある。平成 19 年度科学研究費「『今昔物語集』の KWIC 作成の原理的問題とその意味・文法論的利用の可能性」（代表：鈴木泰・東京大学大学院教授、課題番号 17520293）。

#### ENGLISH SUMMARY

**On the definition and *kun*-rendering of “云々” (*tsutsuyaku*: ‘to whisper’) and “髣” (*kujiru*: ‘to dig’) in accordance with the list of *Kun*-renderings in the *Konjaku Monogatari-shū*, vol. 26.**

ABE Seiya & ITO Mariko, edit.

In making the list of *kun*-renderings for vol. 26 of the *Konjaku Monogatari-shū*, we examined the method of researching *kun*-renderings. As a case study, the following two examples were selected- “云々” and “髣”. We were able to clarify that these lexical items, both from vol. 26, should be read as follows- “云々” (*tsutsuyaku*: ‘to whisper’) and “髣” (*kujiru*: ‘to dig’)

*Key Words*: *kun*-rendering, *tsutsuyaku* (‘to whisper’), *kujiru* (‘to dig’), *Konjaku-Monogatari-shū* vol. 26, a lexicon from the *Chūko* era

## 別表 『今昔物語集 卷二六』 注釈書訓釈異同表

『今昔物語集 卷二六』 注釈書訓釈異同表の凡例

①対照した注釈書は次の五書である。

新・旧日本古典文学大系（岩波書店）、新・旧日本古典文学全集（小学館）、日本古典集成（新潮社）

②異同の対照表は、新大系を基準として、左側の欄より次のように掲載してある。

「巻数、話数、新大系頁、新大系行、新大系の本文、（その次から各注釈の訓で）旧大系の訓、新大系の訓、旧全集の訓、新全集の訓、集成の訓」（行数は題辞前空白は二行とし、後は直ぐ本文に続くとする）

③対象としたのは、原則、漢字部分の訓の相違するところを対象とした。そのため、本文漢字表記の異同がある部分も対象となっている。それぞれの本文が新大系と異なる場合は、各注釈書の欄に、それぞれの本文表記も括弧に入れて掲示した。なお、漢字の訓釈の相違を問題としたので、本文の相違でも、片仮名部分のみが相違する場合は原則として対象となっていない。

④それぞれの注釈書で読みがふされていない場合やその漢字の部分は、「—」で訓のないことを示した。

②③④の例——

26	20	83	5	其二	(共) —ニ	そこニ	(共) ともニ	(共) ともニ	(共) —ニ
----	----	----	---	----	--------	-----	---------	---------	--------

⑤本文の欠字や欠落部分は、「□」などで示した。

⑥諸本によって該当部分のない場合は、「×」などで示した。

『今昔物語集』卷 26 五注釈書 異訓異同表									
卷	話	頁	行	本文 (新大系)	旧大系	新大系	旧全集	新全集	集成
『今昔物語集』卷 26 第 1 話									
26	1	4	3	若子	みづご	みづこ	わかご	わかご	—
26	1	4	3	鬮取	つかみとれる	つかみとる	つかみとる	つかみとる	つかみール
26	1	4	4	七美	しつみ	しづみ	しつみ	しつみ	しつみ
26	1	4	4	若子	みづご	みづこ	わかご	わかご	わくご
26	1	4	6	父母	ぶも	ちちはは	ぶも	ぶも	ぶも
26	1	4	9	宿ヌ	やどりしヌ	やどりヌ	やどりヌ	やどりヌ	—リヌ
26	1	4	9	女子	によし	をむなご	をむなご	をむなご	をんなご
26	1	4	10	大路	おほぢ	おほち	おほぢ	おほぢ	おほぢ
26	1	4	10	宿タル	やどりしタル	やどりタル	やどりタル	やどりタル	—リタル
26	1	4	12	宿タル	やどりしタル	やどりタル	やどりタル	やどりタル	—リタル
26	1	4	12	来タル	きたりタル	—タル	きたル	きたル	—タル
26	1	4	12	持タル	もタル	もちタル	もちタル	もちタル	もチタル
26	1	4	13	奪フ	ばフ	うばフ	ばフ	ばフ	うばフ
26	1	4	13	不被奪	ばはれじ	うばはれじ	ばはれじ	ばはれじ	—ハレジ
26	1	4	14	罵テ	のりテ	のりテ	のりテ	のりテ	のしりテ
26	1	4	14	噉ヒ	くヒ	くらヒ	くヒ	くヒ	くらヒ
26	1	4	16	家主	—ノあるじ	いへあるじ	いへあるじ	いへあるじ	いへあるじ
26	1	4	16	泣ノミ	なきにノミ	なきにノミ	なきにノミ	なきにノミ	—キノミ
26	1	5	1	宿人	やどりしタル—	やどりびと	やどりうど	やどりうど	やどりうど
26	1	5	4	養ヒ立テ	—ヒたテ	—ヒたてテ	やしなヒたてテ	やしなヒたてテ	—ヒ—テ
26	1	5	9	聞ユレ	—ユレ	—ユレ	きこユレ	きこユレ	—エシ
26	1	5	13	来ニケル	きたりテケル	—ニケル	きニケル	きニケル	—ニケル
26	1	5	16	養ヒ立ツレバ	—ヒたツレバ	やしなヒたてツレバ	やしなヒたツレバ	やしなヒたツレバ	—ヒ—ツレバ
26	1	6	2	噉ヒ	くヒ	くらヒ	くヒ	くヒ	くらヒ
26	1	6	3	宿報	すくほう	しくほう	しくほう	しくほう	しゆくほう
26	1	6	3	父子	—	—	ふし	ぶし	—
26	1	6	3	宿世	すくせ	しくせ	しくせ	しくせ	すくせ
『今昔物語集』卷 26 第 2 話									
26	2	6	6	方 (題辭)	—に	かたに	かたに	かたに	—へ
26	2	6	6	行者 (題辭)	—きし—	ゆくもの	ゆくもの	ゆくもの	—ク—
26	2	6	6	生 (題辭)	しやうぜる	うむ	しやうずる	しやうずる	—ム
26	2	6	10	大路	おほぢの	おほちの	おほぢの	おほぢの	おほぢノ
26	2	6	10	辺ニ	ほとりニ	ほとりニ	ほとりニ	わたりニ	ほとりニ
26	2	6	14	女子	によし	をむなご	をむなご	をむなご	—
26	2	6	15	女子	によし	—	をむなご	をむなご	—
26	2	6	16	行テ	あるきて	ありきて	ありきて	ありきて	—キテ
26	2	7	2	従者	とも—	—	じゆしや	じゆしや	—
26	2	7	3	女子	によし	—	をむなご	をむなご	—
26	2	7	4	経ルニ	へタルニ	フルニ	フルニ	フルニ	—ルニ
26	2	7	5	女子	によし	—	をむなご	をむなご	をんなご
26	2	7	8	従者	とも—	—	じゆしや	じゆしや	—
26	2	7	9	辺ニ	ほとりニ	ほとりニ	ほとりニ	あたりニ	ほとりニ
26	2	7	9	不見	みず	みず	みず	みず	—エズ
26	2	7	9	経ル	へタル	—ル	フル	フル	—ル
26	2	7	10	男子	なんし	をのこご	をのこご	をのこご	—
26	2	7	12	女子	によし	—	をむなご	をむなご	—
26	2	7	13	従者	とも—	—	じゆしや	じゆしや	—
26	2	8	3	極テ	きはめテ	きはめテ	きはめテ	きはめテ	—ジキ
26	2	8	9	見合セムト	—セト	みあはセムト	みあはセト	みあはセト	—ハセムト
26	2	8	11	然ハ	されバ	さハ	さハ	さハ	さハ







26	5	18	1	生死モ	いくともしぬとモ	いきしにモ	いくともしすとモ	いくともしすとモ	いきしにモ
26	5	18	1	候へ	—へ	さぶらへ	さむらへ	さぶらへ	—へ
26	5	18	1	候フ	—フ	—フ	さむらフ	さぶらフ	—フ
26	5	18	2	候ハン	—ハム	—ハン	さむらハン	さぶらハン	—ハン
26	5	18	2	本意	—	—	ほんい	ほんに	—
26	5	18	3	吉日	よき—	きちにち	よきひ	よきひ	よき—
26	5	18	4	強縁	がうえん	がうえん	がうニえん	がうえん	がうえん
26	5	18	5	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	18	5	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	18	6	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	18	6	本意	—	—	ほんい	ほんに	—
26	5	18	7	養	やしなふ	やしなひ	やしなふ	やしなふ	—フ
26	5	18	7	忝ク	かたじけなく	かたじけなく	(参) まゐり	(参) まゐり	かたじけなく
26	5	18	8	御サンズル	おはしまサムズル	おはサンズル	おはサンズル	おはサンズル	—サンズル
26	5	18	9	介殿	すけのとの	すけのとの	すけのとの	すけのとの	すけどの
26	5	18	9	可然	しかるべき	ざるべき	しかるべき	しかるべき	ざるべき
26	5	18	14	御前	—	ごぜん	おほむまへ	おほむまへ	—
26	5	18	14	何ガ	いかにカ	いかが	いかが	いかが	いかが
26	5	18	15	然	しか	さ	しか	しか	さ
26	5	18	16	朝	つとめて	つとめて	あした	あした	つとめて
26	5	19	2	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	19	2	賢ニ	かしこげニ	さかしらニ	かしこげニ	かしこげニ	かしこげニ
26	5	19	2	候ツル	さぶらひツル	さぶらひツル	さむらひツル	さぶらひツル	—ヒツル
26	5	19	2	候へバ	—へバ	—へバ	さむらへバ	さぶらへバ	—へバ
26	5	19	3	候ツル	さぶらひツル	—ツル	さむらひツル	さぶらひツル	—ヒツル
26	5	19	4	候フニ	—フニ	—フニ	さむらフニ	さぶらフニ	—フニ
26	5	19	4	不御	おはせず	おはせず	おはせざる	おはせざる	—セズ
26	5	19	5	候ナン	さぶらひナム	さぶらひナン	さむらひナン	さぶらひナン	—ヒナン
26	5	19	5	候フ	—フ	—フ	さむらフ	さぶらフ	—フ
26	5	19	5	御許シ	—シ	—シ	おほむゆるシ	おほむゆるシ	—ゆるし
26	5	19	5	候ハバ	—ハバ	—ハバ	さむらハバ	さぶらハバ	—ハバ
26	5	19	5	不騒	さわがず	さわがしからず	さわがしからず	さわがしからず	—ガズ
26	5	19	5	候フ	—フ	—フ	さむらフ	さぶらフ	—フ
26	5	19	6	候	さぶらはむ	さぶらふ	さむらはむ	さぶらはむ	—フ
26	5	19	7	打被	うちかつげ	うちかつげ	うちかつげ	うちかつげ	うちかつげ
26	5	19	8	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	19	8	此許	かくばかり	かばかり	かばかり	かばかり	かくばかり
26	5	19	10	心	むね	—	こころ	こころ	—
26	5	19	10	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	19	11	小弓	ちひさき—	こゆみ	こゆみ	こゆみ	—
26	5	19	11	提テ	ひさげテ	ひさげテ	ひさげテ	ひさげテ	さゲテ
26	5	19	11	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	19	11	寄来テ	よりきたりテ	よりきて	よりきたりテ	よりきて	—リーテ
26	5	19	12	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	19	13	徒然気	さうごしげ	つれづれげ	つれづれげ	つれづれげ	さびしげ
26	5	19	13	行セ	あるかせ	ありかせ	ありかせ	ありかせ	あるかせ
26	5	19	14	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	19	14	伯父父	をぢち	をぢちち	をぢち	をぢち	をぢち
26	5	19	15	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	19	16	云云	つつやく	—	つつやく	いひのく	つつやく
26	5	20	2	曳将	ひきもて	ひきみて	ひきみて	ひきみて	ひきもて
26	5	20	2	来ヌ	きたりヌ	きヌ	きたりヌ	きたりヌ	きたりヌ
26	5	20	2	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	20	2	射立テ	—たテ	いたてテ	いたてテ	いたてテ	—テテ
26	5	20	3	従者	とも—	—	じゆしや	じゆしや	—
26	5	20	4	小胡録	ちひさきやなぐひ	こやなぐひ	こやなぐひ	こやなぐひ	小サキやなぐひ
26	5	20	4	出来タリ	いできタリ	いできタリ	いできタリ	いできタリ	—データリ

26	5	20	4	有	ありし	ある	ある	ある	ある	—ル
26	5	20	6	去	さり	のき	さり	さり	さり	さり
26	5	20	8	候フ	—フ	—フ	さむらフ	さぶらフ	—フ	—フ
26	5	20	9	将入テ	みていれテ	みていりテ	みていりテ	みていりテ	みていりテ	—て—りテ
26	5	20	9	暫	しばし	しばし	しばらく	しばらく	しばらく	しばシ
26	5	20	10	打思テ	うちおぼえテ	うちおぼえテ	うちおもひテ	うちおもひテ	うちおもひテ	うちおぼエテ
26	5	20	10	敵ク	いつくしく	いつくしく	いつくしく	いつくしく	いつくしく	いつシク
26	5	20	11	男	—	—	をとこ	をのこ	—	—
26	5	20	14	不堪カシ	たへずカシ	たへじカシ	たへじカシ	たへじカシ	たへじカシ	—へじカシ
26	5	20	15	男	—	—	をとこ	をのこ	—	—
26	5	20	15	外様	よそ—	ほかざま	ほかざま	ほかざま	ほかざま	ほかざま
26	5	20	16	殺テン	ころシテム	ころシテン	ころシテン	ころすラン	—シテン	—シテン
26	5	20	16	踏。周テ	(踏固) ふみかた めテ	ふむ。あわてテ	(踏固) ふみあわ てテ	(踏固) ふみあわ てテ	(踏固) ふみかた メテ	(踏固) ふみかた メテ
26	5	21	2	然気	さるけ	さるけ	さるけ	さるけ	さるけ	ざりげ
26	5	21	3	何ニ	いかニ	なにニ	いかニ	いかニ	いかニ	いかニ
26	5	21	4	女子	によし	をむなご	をむなご	をむなご	をむなご	をんなご
26	5	21	4	男子	なんし	—	をのこご	をのこご	—	—
26	5	21	5	女子	によし	—	をむなご	をむなご	—	—
26	5	21	5	男	—	—	をとこ	をのこ	—	—
26	5	21	7	来ニ	きたりニ	—ニ	きたりニ	きニ	—タリ	—タリ
26	5	21	7	塗籠	—リ	ぬりごめ	ぬりごもり	ぬりごもり	—リ	—リ
26	5	21	9	従者	ともの一	—	じゆしや	じゆしや	—	—
26	5	21	10	舎人男	とねりの一	とねりをのこ	とねりをのこ	とねりをのこ	とねりをのこ	とねりをのこ
26	5	21	11	急	いそぎ	いそぎ	きふニ	いそぎ	—ギ	—ギ
26	5	21	13	押懸テ	おしかけて	おしかかりテ	おしかけて	おしかけて	—シかけて	—シかけて
26	5	21	13	不思	おぼえず	おもはず	おぼえず	おぼえず	おぼエズ	おぼエズ
26	5	21	14	数度	すど	あまたたび	すど	すど	すど	すど
26	5	21	14	此様	かやう	かやう	かやう	かやう	かやう	かやう
26	5	21	15	押廻シ	おしめぐらシ	おしまはシ	おしめぐらシ	おしめぐらシ	おしめぐらシ	おしめぐらシ
26	5	21	15	々々	—	おしまはし	おしめぐらし	おしめぐらし	—ラシ	—ラシ
26	5	21	16	何方	いづれのかた	いづかた	いづかた	いづかた	いづかた	いづかた
26	5	21	16	病人	やめる—	—	びやうにん	びやうにん	—	—
26	5	22	3	舎人男	とねりの一	とねりをのこ	とねりをのこ	とねりをのこ	とねりをのこ	とねりをのこ
26	5	22	4	舎人男	とねりの一	—	とねりをのこ	とねりをのこ	—	—
26	5	22	5	候ラン	さぶらふラム	さぶらふラン	さむらふラン	さぶらふラン	—フラン	—フラン
26	5	22	6	舎人男	とねりの一	—	とねりをのこ	とねりをのこ	—	—
26	5	22	6	候ニ	さぶらふニ	—ニ	さむらふニ	さぶらふニ	—フニ	—フニ
26	5	22	6	候フ	—フ	—フ	さむらフ	さぶらフ	—フ	—フ
26	5	22	7	死人	しにし—	—	しにん	しにん	—	—
26	5	22	9	舎人男	とねりの一	—	とねりをのこ	とねりをのこ	—	—
26	5	22	9	怖シ気	—シげ	おそろシげ	おそろシげに	おそろシげに	—シ—	—シ—
26	5	22	9	不云ソ	いひソ	いひソ	いはずシテ	いひソ	—ヒソ	—ヒソ
26	5	22	11	舎人男	とねりの一	—	とねりをのこ	とねりをのこ	—	—
26	5	22	12	不埋ケレ	うづまざりケレ	うづみざりケレ	うづまざりケレ	うめざりケレ	—マザリケレ	—マザリケレ
26	5	22	13	此	—	これ	ここ	ここ	—レ	—レ
26	5	22	15	此	この	この	これ	これ	—ノ	—ノ
26	5	22	16	心	むね	—	こころ	こころ	—	—
26	5	22	16	搔寄タレ	かきよせタレ	かきよせタレ	かきよせタレ	かきよせタレ	—キーセタレ	—キーセタレ
26	5	23	1	煖タル	あたたまりタル	あたたまりタル	あたたまりタル	あたたか也	あたたまりタル	あたたまりタル
26	5	23	2	舎人男	とねりの一	—	とねりをのこ	とねりをのこ	—	—
26	5	23	3	宛テ	あて	あてテ	あてテ	あてテ	あてテ	あてテ
26	5	23	4	験	げ	しるし	しるし	しるし	しるし	しるし
26	5	23	5	舎人男	とねりの一	—	とねりをのこ	とねりをのこ	とねりをのこ	とねりをのこ
26	5	23	6	暫	しばし	しばし	しばらく	しばらく	しばシ	しばシ
26	5	23	6	願	ねがひ	ぐわん	ぐわん	ぐわん	—	—
26	5	23	6	験	げ	—	しるし	しるし	—	—

26	5	23	7	咽	のむど	のむど	のむど	のむど	のど
26	5	23	8	潤ヌラン	うるひヌラム	うるひヌラン	うるひヌラン	うるひヌラン	うるほヒヌラン
26	5	23	10	見開タレ	—ひらきタレ	みあけタレ	みひらきタレ	みひらきタレ	—キタレ
26	5	23	10	何ニモ	いどこニモ	いかニモ	いどこニモ	いどこニモ	いかニモ
26	5	23	12	願	ねがひ	ぐわん	ぐわん	ぐわん	—
26	5	23	15	不見	みせず	みえず	みせず	みせず	—セズ
26	5	23	15	舎人男	とねりの—	—	とねりをのこ	とねりをのこ	—
26	5	23	16	追次テ	おひつづきて	おひつづきて	おひつづきて	おひつづきて	—ヒツギテ
26	5	24	1	然々	しか—	しかしか	しかしか	しかしか	しかじか
26	5	24	2	此	ここ	ここ	これ	ここ	—レ
26	5	24	3	不云バ	(いはず)	いはねバ	いはねバ	いはねバ	—ハズ
26	5	24	3	例様	れいのやう	れいごま	れいのやう	れいのやう	—ノ—
26	5	24	4	妻夫	めをうと	めをうと	めをうと	めをうと	めをうと
26	5	24	5	粥	しるかゆ	かゆ	しるかゆ	しるかゆ	かゆ
26	5	24	6	何事	いかなる—	—	なにごと	なにごと	—
26	5	24	6	此	ここ	ここ	これ	ここ	—コ
26	5	24	7	然々	しかしか	しかしか	しかしか	しかしか	しかじか
26	5	24	9	然テモ	さてモ	さてモ	さるにてモ	さるにてモ	—テモ
26	5	24	10	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	24	11	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	24	11	来ツル	きたりツル	—ツル	きたりツル	きツル	—ツル
26	5	24	11	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	24	13	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	24	13	此	—	この	これ	これ	—レ
26	5	24	13	謀	はかりごと	はかりこと	はかりこと	はかりこと	はかりごと
26	5	24	15	返々ス	かへすかへス	かへすがへス	かへすがへス	かへすがへス	—ス—ス
26	5	24	16	食セ	くはセ	くはセ	(云) いはセ	(云) いはセ	食ハセ
26	5	24	16	従者	ともの—	—	じゆしや	じゆしや	—
26	5	24	16	共モ	ども	—モ	どもモ	ども	—モ
26	5	24	16	掻澄テ	かきすましテ	かきすみテ	かきすましテ	かきすましテ	かきすましテ
26	5	25	3	思ツレ	おぼえツレ	おもひツレ	おもひツレ	おもひツレ	—ヒツレ
26	5	25	4	伯父父	をぢち	をぢちち	をぢち	をぢち	をぢち
26	5	25	5	不見バ	みねバ	みねバ	みえねバ	みねバ	—ネバ
26	5	25	6	然ハ	されバ	さハ	さハ	さハ	されバ
26	5	25	7	男	—	—	をとこ	をのこ	—
26	5	25	7	出来テ	いできたりテ	いできて	いできて	いできて	—デーテ
26	5	25	8	伯父父	をぢち	をぢちち	をぢち	をぢち	—
26	5	25	11	不御	おはせず	おはさず	おはせず	おはせず	おはセズ
26	5	25	12	殆シカリ	ほとほどシカリ	ほとほどシカリ	ほとほどシカリ	ほとほどシカリ	ほとほどシカリ
26	5	25	13	来ケル	きたりケル	—ケル	きたりケル	きたりケル	—ケル
26	5	25	13	従者	ともの—	—	じゆしや	じゆしや	—
26	5	25	13	抱ヘテ	いだかヘテ	かかヘテ	いだかヘテ	いだかヘテ	いだかヘテ
26	5	25	14	来着タリ	きたりつきタリ	きつきタリ	きたりつきタリ	きつきタリ	—キタリ
26	5	25	15	主	あるじ	ぬし	あるじ	あるじ	あるじ
26	5	25	16	暫	しばらく	しばらく	しばらく	しばらく	—ク
26	5	26	2	児様	ちご、—	ちごさま	ちご、さま	ちご、さま	—、さま
26	5	26	4	不泣	なかず	なかで	なかず	なかず	—カズ
26	5	26	4	喘	いきづき	あへき	いきづき	いきづき	いきづき
26	5	26	5	被出テ	いでられテ	いだされテ	いだされテ	いだされテ	—デラレテ
26	5	26	5	然気	さるけ	さるけ	さるけ	さるけ	さリ—
26	5	26	6	己	おのれ	おの	おのれ	おのれ	—
26	5	26	7	曖	なぐさみ	なぐさめ	なぐさみ	なぐさみ	なぐさミ
26	5	26	9	男	—	をのこ	をとこ	をのこ	—
26	5	26	10	来レバ	きたレバ	くれバ	きたレバ	きたレバ	—レバ
26	5	26	10	然気無	さるけなげ	さるけなげ	さるけなげ	さるけなげ	さリげ—ク
26	5	26	11	将入	みていれむ	みている	みていれむ	みていれむ	—テ—レム
26	5	26	11	呼放テ	よびはなちテ	よびはなちテ	よびはなつテ	よびはなちテ	—ビーチテ





26	8	35	9	笈	ふみはこ	おひ	おひ	おひ	おひ	おひ
26	8	35	10	居へテ	すへキ	すへテ	すへキ	すへキ	すへキ	すゑキ
26	8	35	10	食物	じきもつ	くひもの	じきもつ	じきもつ	じきもつ	じきもつ
26	8	35	10	持来タル	もてきたりタル	もてきタル	もてきタル	もてきタル	もてきタル	もて一タル
26	8	35	11	魚	—	うを	いを	いを	—	—
26	8	35	11	不食シテ	くらはずシテ	くはずシテ	くはずシテ	くはずシテ	くはずシテ	一ハズシテ
26	8	35	11	出来テ	いできたりテ	いできテ	いできたりテ	いできたりテ	いできたりテ	一デーテ
26	8	35	12	不食ゾ	くらはぬゾ	めさぬゾ	くはぬゾ	くはぬゾ	くはぬゾ	一ハヌゾ
26	8	35	12	食ネバ	くらはネバ	くはネバ	くはネバ	くはネバ	くはネバ	一ハネバ
26	8	35	13	見居テ	一キテ	みみテ	みみテ	みみテ	みみテ	みすエテ
26	8	35	14	不食デ	くはデ	めさデ	くはデ	くはデ	くはデ	一ハデ
26	8	35	15	奉テンズル	たてまつりテムズル	たてまつりテンズル	たてまつりテンズル	たてまつりテンズル	たてまつりテンズル	一ランズル
26	8	35	16	御マセ	おはしまセ	おはしまセ	ましマセ	おはしまセ	おはしまセ	一シマセ
26	8	35	16	外	—	ほか	と	ほか	と	と
26	8	36	1	為ム	せム	せム	せム	せん	せん	すレ
26	8	36	2	然	しか	さ	しか	しか	しか	しか
26	8	36	2	可行方モ	ゆくべきはうモ	ゆくべき一モ	ゆくべきかたモ	ゆくべきかたモ	ゆくべきかたモ	一クベキ一モ
26	8	36	3	家主	一ノあるじ	いへあるじ	いへあるじ	いへあるじ	いへあるじ	いへあるじ
26	8	36	3	食ヲ	じきヲ	くふヲ	じきヲ	じきヲ	じきヲ	じきヲ
26	8	36	3	食テ	くらひテ	くひテ	くひテ	くひテ	くひテ	一ヒテ
26	8	36	6	可思也	おもふべき一	おぼすべき一	おもふべきなり	おもふべきなり	おもふべきなり	一スベキナリ
26	8	36	8	夫婦	めをと	めをうと	めをうと	めをうと	めをうと	めをうと
26	8	36	8	食物	じきもつ	くひもの	じきもつ	じきもつ	じきもつ	—
26	8	36	9	被取ル	とらるル	とらル	とらるル	とらるル	とらるル	一ラルル
26	8	36	14	労ク	いたづク	一ク	らうたく	いたはり	いたはり	いたはり
26	8	36	14	吉シ	一シ	よし	よし	よし	よし	よケレ
26	8	36	15	食肥ル	くらひこゆる	くひこゆる	くひこゆる	くひこゆる	くひこゆる	一ヒ一ユル
26	8	37	1	付テモ	つきテモ	つけテモ	つきテモ	つけテモ	つけテモ	一ケテモ
26	8	37	1	客人	まらふと	まらうと	まらうど	まらうど	まらうど	まらうど
26	8	37	2	来テ	きたりテ	一テ	きたりテ	きたりテ	きたりテ	一テ
26	8	37	3	御サン	おはしまサム	おはサン	おはしまサン	おはしまサン	おはしまサン	おはしまサン
26	8	37	4	得マンカバ	えざらマシカバ	一マシカバ	えマシカバ	えざらマシカバ	えざらマシカバ	一ザラマシカバ
26	8	37	4	近来	このごろ	このごろ	このごろ	このごろ	このごろ	ちかごろ
26	8	37	5	明年	あくる一	みやうねん	あくるとし	あくるとし	あくるとし	あくるとし
26	8	37	5	後々	しりぞくしりぞく	のちのち	しりぞくしりぞく	しりぞくしりぞく	しりぞくしりぞく	しりへニ
26	8	37	5	去ヌレバ	さりヌレバ	さりヌレバ	いヌレバ	いヌレバ	いヌレバ	一リヌレバ
26	8	37	6	食ヨ	くらはせヨ	くはせヨ	くはせヨ	くはせヨ	くはせヨ	一ハセヨ
26	8	37	7	食ニ付テモ	くらふ二つきテモ	くふ二つけテモ	くふ二つけテモ	くふ二つけテモ	くふ二つけテモ	一フニ一ケテモ
26	8	37	8	掘間	をこづりとへ	をこつりとへ	をこづりとへ	をこづりとへ	をこづりとへ	をこつり一へ
26	8	37	9	事急グ氣	一グけはい	一グけ	こといそグけはひ	こといそグけはひ	こといそグけはひ	一いそグ一
26	8	37	10	副テ	そひテ	そへテ	そひテ	そひテ	そひテ	そへテ
26	8	37	11	働ケレ	つれなケレ	つらケレ	くはしケレ	つらケレ	つらケレ	つらケレ
26	8	37	16	其御シ	そこおはシ	そこのおはシ	そこおはシ	そこおはシ	そこおはシ	そこおはシ
26	8	38	1	求不得時	もとめえざる一	もとめえぬ一	もとめえざるとき	もとめえざるとき	もとめえざるとき	一メ一ザル一
26	8	38	2	其	そこ	その	その	その	その	そこ
26	8	38	3	我	—	わが	われ	われ	われ	一レ
26	8	38	5	直ク臥テ	ただしくふせて	うるはしくふせて	うるはしくふせて	うるはしくふせて	うるはしくふせて	うるはしく一せて
26	8	38	6	荒テ	あれテ	あれテ	あれテ	あれテ	あれテ	(怒)一リテ
26	8	38	8	労ツル	いたづきツル	いたはりツル	いたはりツル	いたはりツル	いたはりツル	いたはりツル
26	8	38	8	体	かたち	てい	かたち	てい	かたち	すがた
26	8	38	11	返々ス	かへすかへス	かへすがへス	かへすがへス	かへすがへス	かへすがへス	一ス一ス
26	8	38	11	持タリ	もタリ	もタリ	もちタリ	もちタリ	もちタリ	一チタリ
26	8	38	12	寵テ	さかえテ	おごりテ	さかえテ	さかえテ	さかえテ	おごりテ
26	8	38	14	前	—	さき	まへ	まへ	まへ	—
26	8	38	14	此家	この一ニ	この一	このいへに	このいへに	このいへに	一ノ一
26	8	38	14	注連ヲ	しりくへヲ	しりくへヲ	しりくへヲ	しりくへヲ	しりくへヲ	しめヲ

26	8	38	15	何日	—	いくか	いくにち	いくにち	いくにち	いくか
26	8	39	2	直ク	ただシク	—ク	うるはシク	うるはシク	—シク	
26	8	39	2	傳立ル	かしづきたテ	かしづきたツル	かしづきたツル	かしづきたツル	かしづキーツル	
26	8	39	3	引被テ	ひきかつぎテ	ひきかづぎテ	ひきかつぎテ	ひきかつぎテ	—キかづギテ	
26	8	39	5	着並	(着座並) ちやく(ざし) なみ	つきなみ	つきなみ	つきなみ	—キなミ	
26	8	39	6	舞樂ビ畢テ	まひあそビをはテ	まひたのしビはテ	まひたのしビはテ	まひたのしビはテ	まひあそびはテ	
26	8	39	6	呼立テ	よびたテ	よびたテ	よびたテ	よびたテ	—ビ—テテ	
26	8	39	6	結ヲ	もとゆひヲ	くくりヲ	くくりヲ	くくりヲ	くくりヲ	
26	8	39	7	不動シテ	はたらかずシテ	はたらかずシテ	うごかずシテ	うごかずシテ	—カズシテ	
26	8	39	7	合テ	ふふめテ	ふくめテ	ふくめテ	ふくめテ	ふくメテ	
26	8	39	8	引閉テ	(引閉) ひきたテ	ひきとぢテ	ひきたテ	ひきたテ	—キ—ヂテ	
26	8	39	9	返ヌ	かへリヌ	かへリヌ	かへス	かへス	—リヌ	
26	8	39	9	勝	もも	また	また	また	また	
26	8	39	9	中	あひだ	—	なか	なか	—	
26	8	39	9	然気	さるけ	さるけ	さるけ	さるけ	さりげ	
26	8	39	11	ギト	きと	ぎと	きと	きと	きと	
26	8	39	12	思ケル	おもひケル	おぼえケル	おぼえケル	おぼえケル	—ヒケル	
26	8	39	13	出来テ	いできたリテ	いできて	いできて	いできて	—デ—テ	
26	8	39	14	掻開テ	かきひらきて	かきあけて	かきひらきて	かきひらきて	—キ—キテ	
26	8	39	15	此様ニ	かくやうニ	かやうニ	かやうニ	かやうニ	かやうニ	
26	8	39	16	着并テ	つきなみテ	つきなみならびテ	つきなみテ	つきなみテ	—キ—ミテ	
26	8	40	1	方様ニ	かた—ニ	かたざまニ	かたざまニ	かたざまニ	かたさまニ	
26	8	40	1	歩ミ	—ビ	—ミ	あゆミ	あゆミ	—ビ	
26	8	40	1	寄来テ	よりきたリテ	よりきて	よりきて	よりきて	—リ—テ	
26	8	40	2	勝	もも	—	また	また	—	
26	8	40	3	仰様ニ	のけ—ニ	のけざまニ	のけざまニ	のけざまニ	のけさまニ	
26	8	40	4	不指宛デ	さしあてずシテ	さしあてデ	さしあてずシテ	さしあてずシテ	—シ—テズシテ	
26	8	40	7	瞰ハム	くらハム	くらハン	くハム	くハム	くらハム	
26	8	40	8	不然ハ	さらずハ	さらずハ	さらずハ	さらずハ	しカラズハ	
26	8	40	9	突立テ	つき—テ	つきたテ	つきたテ	つきたテ	—キ—テテ	
26	8	40	10	然ラバ	—ラバ	ざラバ	しかラバ	しかラバ	—ラバ	
26	8	40	11	出来タリ	いできたリタリ	いできたリ	いできたリ	いできたリ	—デ—タリ	
26	8	40	12	断ニ	(折) たちニ	たちニ	(折) をりニ	(折) をりニ	(折) —リニ	
26	8	40	12	遣テ	つかはシテ	つかはシテ	つかはシテ	つかはシテ	やりテ	
26	8	40	16	食物	じきもつ	くひもの	じきもつ	じきもつ	じきもつ	
26	8	41	1	去タレ	さりタレ	のきタレ	さりタレ	さりタレ	—リタレ	
26	8	41	3	閉籠テ	(閉籠) たてこめテ	とぢこめテ	たてこめテ	たてこめテ	とぢこメテ	
26	8	41	5	静心無	しづごころなく	しづごころなく	しづごころなく	しづごころなく	しづごころなく	
26	8	41	6	持タリ	もタリ	もタリ	もちタリ	もちタリ	—チタリ	
26	8	41	10	来ル	きたル	くる	きたル	きたル	—タル	
26	8	41	10	此ハ	—ハ	こハ	これハ	これハ	—レハ	
26	8	41	11	瞰ヤセン	くひヤセム	くらひヤセン	くひヤセン	くひヤセン	くらひヤセム	
26	8	41	12	恐テ	おそれテ	おぢテ	おそれテ	おそれテ	—レテ	
26	8	41	14	踏立	ふみたテ	ふみたツ	ふみたツ	ふみたツ	—ミ—ツ	
26	8	41	15	出来テ	いできたリテ	いできて	いできたリテ	いできて	—デ—テ	
26	8	41	16	和君	わぎみ	わきみ	わぎみ	わぎみ	わぎみ	
26	8	41	16	開テ	ひらぎテ	あけて	あけて	あけて	—ケテ	
26	8	42	1	開タレバ	ひらきたレバ	あけたレバ	あけたレバ	あけたレバ	—ケタレバ	
26	8	42	1	入テ	いりテ	いりテ	いれテ	いれテ	—リテ	
26	8	42	5	此ニ	—ニ	これニ	ここニ	ここニ	—レニ	
26	8	42	7	此人	かく—	この—	かくひと	かくひと	この—	
26	8	42	8	己等	おのれ—	おのれら	おのれ—ともがら	おのれ—ともがら	—レ—	



26	9	45	9	寄来テ	よりきたりテ	よりきて	よりきて	よりきて	よりきて	ーリーテ
26	9	45	9	此	ここ	ここ	ここ	ここ	ここ	ーれ
26	9	45	10	領ゼン	ーセム	りやうゼン	りやうゼン	りやうゼン	りやうゼン	りやうゼン
26	9	45	11	過ス	すぐス	すぐス	すぎヌ	すぎヌ	すぎヌ	ース
26	9	45	11	来テ	きたりテ	ーテ	きて	きたりテ	きたりテ	ーテ
26	9	45	12	来ン	きたらム	きたらん	きたらん	きたらん	きたらん	ーン
26	9	45	12	〔許ニ〕	いくらばかり	いかばかり	いくらばかり	いくらばかり	いくらばかり	いかばかり
26	9	45	12	〔許ニ〕	ばかりニ	〔ばかりニ〕	×	ばかりニ	ばかりニ	ばかりニ
26	9	45	14	来ラン	ーラム	きたラン	きたラン	きたラン	きたラン	ータラム
26	9	45	14	体	かたち	てい	てい	てい	てい	てい
26	9	45	14	儲ケンズル	ーケムズル	まうケンズル	まうケンズル	まうケンズル	まうケンズル	まうケンズル
26	9	45	15	体	かたち	ー	てい	てい	てい	ー
26	9	45	15	今明日	けふあす	いまあす	けふあす	けふあす	けふあす	けふあす
26	9	45	15	見テン	ーテム	ーテン	みテン	みテン	みテン	ーテン
26	9	45	15	懸ラン	ーラム	ーラン	かかラン	かかラン	かかラン	ーカラン
26	9	45	15	下来ランズル	くだりーラムズル	くだりきたランズル	くだりきたランズル	くだりきたランズル	くだりきたランズル	くだりータランズル
26	9	45	16	不令上シテ	のぼらしめずシテ	のぼらしめずシテ	のぼらしめずシテ	のぼらしめずシテ	のぼらしめずシテ	あがらしめずシテ
26	9	46	1	憑マンズレバ	たのマンズレバ	たのマンズレバ	たのマンズレバ	たのマンズレバ	たのマンズレバ	たのマンズレバ
26	9	46	1	登センズル	のぼセムズル	のぼセンズル	のぼセンズル	のぼセンズル	のぼセンズル	のぼセンズル
26	9	46	2	登ラン	ーラム	ーラン	のぼラン	のぼラン	のぼラン	ーラン
26	9	46	2	暫	しばし	しばし	しばらく	しばらく	しばらく	しばらく
26	9	46	2	見合センズル	ーセムズル	ーセンズル	みあはセンズル	みあはセンズル	みあはセンズル	ーハセンズル
26	9	46	3	不可為	すべからず	すべからず	なすべからず	なすべからず	なすべからず	ーベカラズ
26	9	46	4	儀立テ	よそほひしたちテ	よそほひしたちテ	よそほひしたちテ	よそほひしたちテ	よそほひしたちテ	よそほひーちテ
26	9	46	4	午時	うまのー	うまのとき	むまのとき	むまのとき	むまのとき	うまノとき
26	9	46	4	食テ	じきシテ	くひテ	くひテ	くひテ	くひテ	ーヒテ
26	9	46	4	此ヨリゾ	ここヨリゾ	ここヨリゾ	これヨリゾ	これヨリゾ	これヨリゾ	ーコヨリゾ
26	9	46	8	来ン	こム	きたらん	コン	コン	コン	ーン
26	9	46	9	出来タリ	いできたりタリ	いできたリ	いできたリ	いできたリ	いできたリ	ーデータリ
26	9	46	10	出来合ハン	いできたりーハム	いできあハン	いできあハン	いできあハン	いできあハン	ーデーあハン
26	9	46	11	音	ー	こゑ	おと	おと	おと	こゑ
26	9	46	11	出来タリ	いできたりタリ	いできたリ	いできたリ	いできたリ	いできたリ	ーデータリ
26	9	46	12	寄来ル	よせきたル	よりきたル	よりきたル	よりきたル	よりきたル	ーリータル
26	9	46	13	蛇	じや	へみ	へみ	へみ	へみ	へみ
26	9	46	13	一把	ーいだき	ひといだき	ひとたばね	ひとたばね	ひとたばね	ひといだき
26	9	46	13	下向フ	ーニーフ	くだりむかフ	したにむかフ	したにむかフ	したにむかフ	したむかフ
26	9	46	15	走上ヌ	はしりのぼりヌ	はしりあがりヌ	はしりのぼりヌ	はしりのぼりヌ	はしりのぼりヌ	ーリーリヌ
26	9	46	16	守テ	まぼりテ	まもりテ	まもりテ	まもりテ	まもりテ	ーリテ
26	9	47	1	番ツゝ	つがひツゝ	つがひツゝ	つがひツゝ	つがひツゝ	つがひツゝ	つがへツツ
26	9	47	1	蛇	じや	ー	へみ	へみ	へみ	ー
26	9	47	2	血肉	ちじし	ちじし	ちじし	ちじし	ちじし	ちみどろ
26	9	47	3	上手	ー	じやうず	うはて	うはて	うはて	うはて
26	9	47	3	一	じゃ	ー	ー	ー	ー	ー
26	9	47	3	少シ□タル	すこしシタル	ーシ□タル	すこシ□タル	すこシ□タル	すこシ□タル	ーシ□タル
26	9	47	5	彌本	ゆみはずのもと	はずのもと	ゆみはずのもと	ゆみはずのもと	ゆみはずのもと	ゆみはずノもと
26	9	47	5	射立	いたツ	いたつ	いたつ	いたつ	いたつ	ーテツ
26	9	47	6	蛇	じや	ー	へみ	へみ	へみ	ー
26	9	47	7	蛇	じや	ー	へみ	へみ	へみ	ー
26	9	47	7	欠テ	かきテ	かきテ	かきテ	かきテ	かきテ	ーケテ
26	9	47	8	久フ	ーフ(ウ)	ひさしフ	びさしフ	びさしフ	びさしフ	ーシウ
26	9	47	8	片塞テ	かたあしなへぎテ	かたあしなへぎテ	かたあしなへぎテ	かたあしなへぎテ	かたあしなへぎテ	かたあしなへぎテ
26	9	47	9	出来タリ	いできたりタリ	いできたリ	いできたリ	いできたリ	いできたリ	ーデータリ
26	9	47	9	食物	じきもつ	くひもの	じきもつ	じきもつ	じきもつ	じきもつ
26	9	47	9	持来テ	もてきたりテ	もてきて	もてきて	もてきて	もてきて	ーテーテ
26	9	47	10	〔伐〕懸テ	ぎりかけテ	〔ぎり〕かけテ	□かけテ	ぎりかけテ	ぎりかけテ	ぎりーケテ
26	9	47	11	ドモ	ドモ	ドモ	ドモ	ドモ	ドモ	ーニ









26	14	62	4	従者共	ともの一ども		じゆしやども	じゆしやども	—
26	14	62	4	罵り覆シテ	のりかへシテ	のりくつがへシテ	のりかへシテ	のりかへシテ	のりかへシテ
26	14	62	5	何チモ	いづチモ	いづチモ	いどこデモ	いどこデモ	いづチモ
26	14	62	5	遣り着テ	—りつきテ	やりつけテ	やりつけテ	やりつけテ	やり—キテ
26	14	62	5	己ガ	おのガ	おのガ	おのれガ	おのガ	おのガ
26	14	62	6	白砂	しろきいさご	しらいさご	しろきいさご	しろきいさご	—
26	14	62	6	方	ほう	かた	かた	かた	—
26	14	62	8	砂	いさご	—	すな	いさご	—
26	14	62	8	搔去テ	かきさりテ	かきのけテ	かきのけテ	かきのけテ	—キーリテ
26	14	62	9	小瓶	ちひさきかめ	こがめ	ちひさきかめ	ちひさきかめ	こかめ
26	14	62	11	髷開テ	くじりあけテ	きさげあけテ	くじりあけテ	ゑりあけテ	くじりあけテ
26	14	62	12	任	—	—	にむ	にむ	にん
26	14	62	13	従者共	ともの一ども	—	じゆしやども	じゆしやども	—
26	14	62	13	拔出テ	ぬきいでテ	ぬきいだしテ	ぬきいでテ	ぬきいでテ	—キーデテ
26	14	62	13	立塞テ	たちふさがりテ	たちふさがりテ	たちふさがりテ	たちふさがりテ	—チふたガリテ
26	14	62	14	衣	—	きぬ	ころも	ころも	ころも
26	14	62	14	従者共	ともの一ども	—	じゆしやども	じゆしやども	—
26	14	62	15	越後	ゑちご	ゑちご	ゑつご	ゑつご	ゑちごの
26	14	62	15	骸	しにかばね	かばね	かばね	かばね	かばね
26	14	62	16	坐ナレバ	ますナレバ	いますナレバ	いますナレバ	いますナレバ	いますナレバ
26	14	62	16	従者共	ともの一ども	—	じゆしやども	じゆしやども	—
26	14	63	1	何条	なんでふ	なんでふ	なんでう	なんでう	なんでう
26	14	63	1	候ハン	—ハム	—ハン	さむらハン	さぶらハン	さぶらハン
26	14	63	4	然々	しか—	しかしか	しかしか	しかしか	しかじか
26	14	63	5	陸奥	—	みちのく	みちのおく	みちのおく	みちのく
26	14	63	6	候フ	—フ	—フ	さむらフ	さぶらフ	—フ
26	14	63	6	受領	じゆりやう	じゆりやう	じゆりやう	じゆりやう	ずりやう
26	14	63	7	書立	かきたてに	かきたて	かきたてに	かきたてに	—ニ
26	14	63	7	除ツレバ	のぞきツレバ	のけツレバ	のぞきツレバ	のぞきツレバ	—キツレバ
26	14	63	8	含タリケル	ふくみタリケル	ふくみタリケル	ふくみタリケル	ふくみタリケル	ふくミタリケル
26	14	63	8	思ヒ候ツルニ	—ヒさぶらひツルニ	—ヒ—ツルニ	おもヒさむらひツルニ	おもヒさぶらひツルニ	—ヒ—ヒツルニ
26	14	63	8	被云合候ツレバ	いひあはれさぶらひツレバ	いひあはせられさぶらひツレバ	いひあはせられさむらひツレバ	いひあはせられさぶらひツレバ	—ヒ—ハレ—ヒツレバ
26	14	63	9	参候ツル也	まゐりさぶらひツル—	まゐり—ツル—	まゐりさむらひツルなり	まゐりさぶらひツルなり	—リ—ヒツルナリ
26	14	63	9	被指出候ヌレバ	さしいだされさぶらひヌレバ	さしいだされさぶらひヌレバ	さしいだされさむらひヌレバ	さしいだされさぶらひヌレバ	—シーダサレ—ヒヌレバ
26	14	63	9	不候デ	さぶらはデ	さぶらはデ	さむらはデ	さぶらはデ	—ハデ
26	14	63	11	然ル	—ル	—ル	—ル	—ル	—ル
26	14	63	11	有ナレ	ありナレ	あんナレ	あんナレ	ありケレ	—ルナレ
26	14	63	12	候ラン	さぶらふラム	さぶらふラン	さむらふラン	さぶらふラン	—フラン
26	14	63	12	宿願	すぐわん	しくぐわん	しくぐわん	しくぐわん	—
26	14	63	14	何許	いくらばかり	いかばかり	いくらばかり	いくらばかり	いかばかり
26	14	63	14	方	ほう	かた	かた	かた	ほう
26	14	63	14	来ニタレバ	きたりニタレバ	—ニタレバ	きたりニタレバ	きニタレバ	—タリニタレバ
26	14	63	15	七八十両許	—ばかり	—ばかり	しちはちじふりやうばかり	しちはちじふりやうばかり	—れうばかり
26	14	63	16	願	ねがひ	ぐわん	ぐわん	ぐわん	ねがひ
26	14	63	16	試候ナン	こころみさぶらひナム	こころみさぶらひナン	こころみさむらひナン	こころみさぶらひナン	—ミーヒナン
26	14	64	1	食物	じきもつ	くひもの	じきもつ	じきもつ	じきもつ
26	14	64	2	従者共	ともの一ども	—	じゆしやども	じゆしやども	—
26	14	64	2	糶メテ	きらメテ	きらメテ	きらメテ	きらメテ	きらめキテ
26	14	64	3	髷テ	くじりテ	きさげテ	くじりテ	ゑりテ	くじりテ
26	14	64	3	開テ	ひらきテ	あけテ	ひらきテ	ひらきテ	—キテ
26	14	64	3	小瓶	ちひさきかめ	こがめ	ちひさきかめ	ちひさきかめ	こかめ





26	17	71	5	御覽ゼヨ	一ゼヨ	ごらんぜヨ	ごらむぜヨ	ごらむぜヨ	—
26	17	71	6	前	一ニ	ぎぎ	まへ	まへ	—
26	17	71	8	朝	つとめて	あした	あした	あした	あした
26	17	71	8	凝テ	よりテ	こりテ	こりテ	こりテ	こりテ
26	17	71	9	何ニカ	いかニカ	なにニカ	なにニカ	なにニカ	—ニカ
26	17	71	9	着テ	つきテ	つきテ	一キテ	一キ	一キテ
26	17	71	10	詣来ニタリ	まうで—ニタリ	もうできニタリ	まうできニタリ	まうできニタリ	—デニタリ
26	17	71	10	近ニ	ちかニ	ちかニ	ちかくニ	ちかくニ	ちかニ
26	17	71	11	実	まことに	まこと	まことに	まことに	—に
26	17	71	12	何事	いかなる—	—	なにごと	なにごと	—
26	17	71	12	来タルニ	きたりタルニ	—タルニ	きたタルニ	きたタルニ	—タルニ
26	17	71	12	候フ	一フ	一フ	さむらフ	さぶらフ	一フ
26	17	71	13	食物	じきもつ	くひもの	じきもつ	じきもつ	じきもつ
26	17	71	13	辺	ほとり	ほとり	ほとり	わたり	—
26	17	71	13	食フ	くらフ	一フ	くフ	くフ	一フ
26	17	71	14	夜前	—	よべ	やぜん	やぜん	やぜん
26	17	71	14	希有ノコトコソ	めづらしフコソ	けうノコトコソ	けうノことコソ	けうノことコソ	けうノことコソ
26	17	71	14	候シ	さぶらひシ	—シ	さむらひシ	さぶらひシ	—ヒシ
26	17	71	15	何事	いかなる—	—	なにごと	なにごと	—
26	17	71	15	戌時	いぬの—	いぬのとき	いぬのときうち	いぬのとき	いぬのとき
26	17	71	16	候ヒシ	—ヒシ	—ヒシ	さむらヒシ	さぶらヒシ	—ヒシ
26	17	72	1	不候	さぶらはず	さぶらはず	さむらはず	さぶらはず	—はず
26	17	72	2	被捕奉タリツル	とらはれたてまつり タリツル	とられたてまつり タリツル	とらはれたてまつり タリツル	とらはれたてまつり タリツル	—へラレ—り タリツル
26	17	72	3	云ン	いはム	いはン	いはン	いはン	—ハム
26	17	72	3	客人	まらふと	—	まらうど	まらうど	—
26	17	72	4	辺り	ほとり	わたり	ほとり	わたり	—
26	17	72	5	被仰ツ〔ル〕	おほせられツル	おほせられツ〔ル〕	おほせられツル	おほせられツル	—セラレツル
26	17	72	6	候ヌ	さぶらはヌ	さぶらはヌ	さむらはヌ	さぶらはヌ	—ハヌ
26	17	72	6	候ツレバ	さぶらひツレバ	さぶらひツレバ	さむらひツレバ	さぶらひツレバ	—ヒツレバ
26	17	72	7	例様	れいのやう	れいぎま	れいのやう	れいのやう	れいのやう
26	17	72	9	食畢テ	くひをはりテ	くひはてテ	くひはてテ	くひをはりテ	—ヒはテテ
26	17	72	9	暗々ニ	くら—ニ	くらぐらニ	くれくれニ	くらくらニ	くれくれニ
26	17	72	12	食物	じきもつ	くひもの	じきもつ	じきもつ	じきもつ
26	17	72	15	食喰	じきはみ	ものくひ	じきくらひ	じきくらひ	じきくらヒ
26	17	72	15	出来テ	いできたりテ	いできたりテ	いできたりテ	いできテ	—デーテ
26	17	72	15	給セテ	一ヒテ	一セテ	たまはセテ	たまはセテ	—ヒテ
26	17	72	16	物狂ハシキ	一くるハシキ	ものぐるハシキ	ものくるハシキ	ものくるハシキ	—ハシキ
26	17	72	16	打咲テ	うちゑみテ	うちわらひテ	うちゑみテ	うちゑみテ	うちゑミテ
26	17	73	1	詣来テ	まうできたりテ	まうできテ	まうできたりテ	まうできたりテ	—データリテ
26	17	73	1	告候ヒケル	つげ—ヒケル	つげ—ヒケル	つげさむらヒケル	つげさぶらヒケル	—ゲーヒケル
26	17	73	1	咲テ	ゑみテ	わらひテ	ゑみテ	ゑみテ	—ミテ
26	17	73	2	此	この	この	ここに	ここに	—ノ
26	17	73	3	候	さぶらふ	さぶらふ	さむらふ	さぶらふ	—フ
26	17	73	5	涌タリ	わかしたり	わかしたり	わかしたり	わかしたり	わキタリ
26	17	73	5	謀出テ	たばかりいでテ	はかりいでテ	たばかりいでテ	たばかりいでテ	はかり—デーテ
26	17	73	8	所	—モ	—	ところ	ところ	—モ
26	17	73	8	来ニタレバ	いできニタレバ	—ニタレバ	きニタレバ	きニタレバ	—デーニタレバ
26	17	73	10	女声	一のこゑ	をむなごゑ	をむなごゑ	をむなごゑ	をんなごゑ
26	17	73	12	辺	ほとり	わたり	ほとり	あたり	ほとり
26	17	73	12	明旦	あくるあした	みやうたん	あくるあした	あくるあした	あくるあした
26	17	73	13	暑預	やまのいも	やまのいも	いも	いも	いも
26	17	73	14	暁	あけぬ	あかつき	あかつき	あかつき	あかつき
26	17	73	15	長薙	ながきむしろ	ながむしろ	ながきむしろ	ながきむしろ	—
26	17	73	15	下衆男	げすの—	げすをのこ	げすをのこ	げすをのこ	げすをのこ









